（是正事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M），臨床心理学専攻（M），理工学専攻（M），生物資源学専攻（M）

７．＜科目の内容が不適切＞

「グローバルコミュニケーションC」について，科目の内容及び方法等について説明が不十分であるため，以下の点について明らかにし，修士課程としての教育内容として十分であることを説明すること。【４専攻共通】

（１）「外国大学，外国研究機関および海外企業に１週間以上留学すること」としているが，想定している留学先，留学するまでの一連の流れ等，留学の方法について説明すること。特に，学生が自ら留学先を見つけてくることも想定されるが，そうした場合にどのように本学が自ら開講する科目として，学生の評価や単位の同一性を担保するのかについても説明すること。

（対応）

以下の内容を「授業科目の概要」及び「シラバス（授業計画）」に記載する。

「グローバルコミュニケーションC」の単位認定は，徳島大学が学生交流協定を結んでいる海外の大学で開講される短期集中コースの受講を主な対象とするが，必ずしもそれだけには限定されない。学生が独自に協定校以外の留学先を見つけてきた場合も含む。しかし，受講のためには，まず主指導教員の許可を必要とする。主指導教員は，そのコースのプログラムの専門性と合計時間数，そして学生の研究テーマとの関連性などを総合的に考慮する。特に，実験・実習などの場合は，実施時間の合計が少なくとも１単位相当以上であることを確認する。その上で，そのプログラムを留学先の”候補”とする。その後，主指導教員は，学生が所属する専攻または基盤コース教員２名以上及び科目を統括する担当教員２名以上を含むプログラム審査委員会を招集する。プログラム審査委員会では申請されたプログラムの内容や期間の妥当性を審議（予備審査）し，そのプログラムへの当該学生の参加の可否判定を行う。

プログラム参加後の単位認定は，帰国後のレポートやポートフォリオ，そして学年末に開催する副指導教員らを含めた全体での報告会での口頭試問の結果をもとに行う。主指導教員はプログラム審査委員会を再招集し，本学が自ら開講する他の講義との単位との同一性が確保されたか否かを総合的に判断する。以上の一連の流れは別図のとおり最終的な単位認定は，各専攻教授会で行う。

なお，想定している留学先は，学生交流協定を締結している提携校のうち，国立台湾科技大学や大連理工大学，トゥールーズ工科大などであり，それぞれの受入れ可能人数 20 名程度である。その他の提携校についてはプログラム内容を各提携校と協議し，追加していく計画である。

（参考）グローバルコミュニケーションＣでの一連の流れ

海外で実施される短期集中コース・研修プログラムの情報収集

↓

参加するプログラムの選定

プログラム内容，実施時間等が分かる資料の準備

↓

指導教員とプログラム内容の相談

プログラム参加理由等の情報，及びプログラム内容，実施時間等が分かる資料を用いた説明

↓

指導教員によるプログラム内容の評価

適当　**不適当**　**単位対象外**

↓

プログラム認定申請

申請書及びプログラム内容，実施時間等が分かる資料の提出

ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ期別	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期
開始時期	5月～7月	8月～11月	12月～1月	2月～3月
申請締切日	4月10日	5月8日	9月4日	12月4日

（2020年度）

↓

プログラム認定審査

申請学生の指導教員＋科目担当教員2名

認定　**不認定**　**単位対象外**

留学

↓

プログラムへの参加

帰国

↓

プログラムのポートフォリオ，レポート，及びプログラム修了証の提出（帰国後2週間以内）

↓

全受講者が参加する報告会にて、プログラムに関する発表の実施（2月末～3月初旬）

↓

発表内容の評価

↓

ポートフォリオ，レポート，発表内容の総合評価

枠の色

受講生が実施

教員が実施

（新旧対照表）授業科目の概要（2 ページ）

新	旧
(2 ページ) 研究科共通科目 グローバル教育科目群 グローバルコミュニケーションC 本講義は，海外で開講される短期集中コースのうち，先端研究等，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が 1 単位に必要な時間数を有するプログラムに参加し，専門分野において高度な知識を修得したと評価した時に単位を認定するものである。知識の修得の評価は，外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を行い，それらの内容を総合的に評価して行う。	（2 ページ） 研究科共通科目 グローバル教育科目群 グローバルコミュニケーションC 外国大学で開講される英語による短期集中コースに参加し，英語により先端技術・科学に関する専門的知識に加え，科学・技術の実用的な知識を修得した時に単位を認定するものである。英語で書かれた外国での先端技術・科学に関するレポートおよびポートフォリオに基づいて評価する。

（新旧対照表）シラバス（授業計画）（11 ページ）

新	旧
(11 ページ) ■　授業科目名 グローバルコミュニケーションC ■　科目分野 研究科共通科目　グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 安澤　幹人 (Mikito Yasuzawa)，コインカー　パンカジ（Koinkar Pankaj） ■　授業形態 講義と演習 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 通年（集中） ■　対象学生・学年	(11 ページ) ■　授業科目名 グローバルコミュニケーションC ■　科目分野 研究科共通科目　グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 安澤　幹人 (Mikito Yasuzawa)，コインカー　パンカジ（Koinkar Pankaj） ■　授業形態 講義と演習 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 通年（集中） ■　対象学生・学年

１・２年次 ■　授業の目的 この授業は，外国大学や外国研究機関等に出向き，海外で開講される先進の研究内容を有する集中講義（研修）を受けることにより，国際的な視野を持って先端研究に関する理解を深める。また，専門分野の海外応用事例を学修することにより，グローバルに展開できる専門知識の育成を図ることを目的とする。 ■　授業の概要 本講義は，海外で開講される短期集中コースのうち，先端研究等，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が１単位に必要な時間数を有するプログラムに参加し，専門分野において高度な知識を修得したと評価した時に単位を認定するものである。知識の修得の評価は，外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を行い，それらの内容を総合的に評価して行う。 ■　キーワード 海外留学，異文化・多文化教育，国際センスの涵養，先端研究の理解 ■　先行科目 ■　関連科目 ■　到達目標 1. 専門分野の先端研究を学修し，海外の研究動向や海外における現場・業界の実情・実体について理解を深める。 2. 専門分野の先端研究を理解し，外国人とのコミュニケーション力を身につける。 ■　授業の計画 １．外国大学，外国研究機関等において実施される短期集中コース・研修が，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が１単位に必要な時間数を有するプログラムであること	１・２年次 ■　授業の目的 この授業は，外国大学に出向き，外国大学で開講される先端技術・科学に関する英語による集中講義（研修）を受けることにより，その国の先端技術・科学に関する理解を深め，専門的知識に加え科学・技術の応用事例を学修しながら実用的な知識の育成を図ることを目的とする。 ■　授業の概要 外国大学で開講される英語による短期集中コースに参加し，英語により先端技術・科学に関する専門的知識に加え，科学・技術の実用的な知識を修得した時に単位を認定するものである。 ■　キーワード 海外留学，異文化・多文化教育，国際センスの涵養，先端技術・科学の理解 ■　先行科目 ■　関連科目 ■　到達目標 1. 先端技術・科学に関する専門的内容を学修し，外国の技術動向や産業の実情について理解を深める。 2. 先端技術・科学に関する専門的内容を理解し，英語によるコミュニケーション力を身につける。 ■　授業の計画 １．外国大学，外国研究機関および海外企業に１週間以上留学すること。

が確認できる資料を提出すること。（1 単位に必要な学習時間は，講義・演習については 15 時間から 30 時間，実験・実習等については，30 時間から 45 時間である。） ２．プログラム実施機関において，定められた教育・研修等を完了すること。 ３．プログラム実施機関が発行する修了証等，定められた教育・研修等を完了したことを証明する資料を提出すること。 ４．教育・研修等のポートフォリオとレポートを提出すること。 ５．帰国後，学内で開催する報告会において学修内容を報告すること。 ■　教科書 ■　参考書 ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を総合的に評価して行う。 ■　受講者へのメッセージ 本授業は，外国大学や外国研究機関等，海外で実施される短期集中コース・研修のうち，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益と認めまれ，かつ，1 単位に必要な学習時間を有するプログラムが対象となります。参加するプログラムの内容が専門分野の教育・研究を行う上で有益と認められるかの判断は，指導教員が行いますので，指導教員とは十分に相談すること。また，単位の取得には，プログラム実施機関が発行する修了証等，定められた教育・研修等を完了したことを証明する資料の提出が必須です。プログラム実施機関が修了証等を発行するか予め確認すること。 ■　ＷＥＢページ	２．それぞれの機関において，要求される研修内容を研修すること。 ３．研修は，それぞれの機関において 15 時間以上を行うものとする。 ４．研修のポートフォリオとレポートを提出すること。 ５．帰国後，報告会において研修内容を報告すること。 ■　教科書 ■　参考書 ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 研修のレポートおよびポートフォリオに基づいて評価する。 ■　受講者へのメッセージ 本授業は，外国大学，外国研究機関および海外企業に１週間以上留学することにより，所定の手続きを経て単位を認定される。 ■　ＷＥＢページ

海外留学に対する諸注意事項については，下記ULRを参照すること。 http://www.cicee.tokushima-u.ac.jp/ ■　オフィスアワー ■　備考	海外留学に対する諸注意事項については，下記ULRを参照すること。 http://www.cicee.tokushima-u.ac.jp/ ■　オフィスアワー ■　備考

（是正事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M），臨床心理学専攻（M），理工学専攻（M），生物資源学専攻（M）

７．（２）留学期間を１週間以上と指定しているが，本学の単位の授与方針と比して１週間で他の単位と同等の学修効果があることを説明すること。

（対応）

以下の内容を「シラバス（授業計画）」に記載する。

１単位認定のために必要な学習時間は，留学先の認定プログラムが講義・演習については 15 時間から 30 時間，実験・実習等については，30 時間から 45 時間であることを明記する。

他の単位と同等の学修効果を得られているかを確認するために，事前チェックと事後チェックを行う体制としている。具体的には，事前のチェックとして，学生が参加を希望するプログラムの内容とレベル，時間数，そして実施形態をプログラム審査委員会で確認する。その上で，事後のチェックとして，帰国後のレポートとポートフォリオ，並びに，学年末に開催する報告会での発表内容をもとに，プログラム審査委員会において，本学が自ら開講する他の講義との単位との同一性が確保されたか否かを総合的に判断する体制としている。

新旧対照表）シラバス（授業計画）（11 ページ）

新	旧
■　授業科目名 グローバルコミュニケーションC ■　科目分野 研究科共通科目　グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 安澤　幹人（Mikito Yasuzawa），コインカー　パンカジ（Koinkar Pankaj） ■　授業形態 講義と演習 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 通年（集中） ■　対象学生・学年 １・２年次 ■　授業の目的	■　授業科目名 グローバルコミュニケーションC ■　科目分野 研究科共通科目　グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 安澤　幹人（Mikito Yasuzawa），コインカー　パンカジ（Koinkar Pankaj） ■　授業形態 講義と演習 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 通年（集中） ■　対象学生・学年 １・２年次 ■　授業の目的

この授業は，外国大学や外国研究機関等に出向き，海外で開講される先進の研究内容を有する集中講義（研修）を受けることにより，国際的な視野を持って先端研究に関する理解を深める。また，専門分野の海外応用事例を学修することにより，グローバルに展開できる専門知識の育成を図ることを目的とする。 ■　授業の概要 本講義は，海外で開講される短期集中コースのうち，先端研究等，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が 1 単位に必要な時間数を有するプログラムに参加し，専門分野において高度な知識を修得したと評価した時に単位を認定するものである。知識の修得の評価は，外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を行い，それらの内容を総合的に評価して行う。 ■　キーワード 海外留学，異文化・多文化教育，国際センスの涵養，先端研究の理解 ■　先行科目 ■　関連科目 ■　到達目標 1．専門分野の先端研究を学修し，海外の研究動向や海外における現場・業界の実情・実体について理解を深める。 2．専門分野の先端研究を理解し，外国人とのコミュニケーション力を身につける。 ■　授業の計画 1．外国大学，外国研究機関等において実施される短期集中コース・研修が，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が 1 単位に必要な時間数を有するプログラムであることが確認できる資料を提出すること。（1 単位	この授業は，外国大学に出向き，外国大学で開講される先端技術・科学に関する英語による集中講義（研修）を受けることにより，その国の先端技術・科学に関する理解を深め，専門的知識に加え科学・技術の応用事例を学修しながら実用的な知識の育成を図ることを目的とする。 ■　授業の概要 外国大学で開講される英語による短期集中コースに参加し，英語により先端技術・科学に関する専門的知識に加え，科学・技術の実用的な知識を修得した時に単位を認定するものである。 ■　キーワード 海外留学，異文化・多文化教育，国際センスの涵養，先端技術・科学の理解 ■　先行科目 ■　関連科目 ■　到達目標 1．先端技術・科学に関する専門的内容を学修し，外国の技術動向や産業の実情について理解を深める。 2．先端技術・科学に関する専門的内容を理解し，英語によるコミュニケーション力を身につける。 ■　授業の計画 1．外国大学，外国研究機関および海外企業に 1 週間以上留学すること。

に必要な学習時間は，講義・演習については15時間から30時間，実験・実習等については，30時間から45時間である。） 2．プログラム実施機関において，定められた教育・研修等を完了すること。 3．プログラム実施機関が発行する修了証等，定められた教育・研修等を完了したことを証明する資料を提出すること。 4．教育・研修等のポートフォリオとレポートを提出すること。 5．帰国後，学内で開催する報告会において学修内容を報告すること。 ■　教科書 ■　参考書 ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を総合的に評価して行う。 ■　受講者へのメッセージ 本授業は，外国大学や外国研究機関等，海外で実施される短期集中コース・研修のうち，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益と認めまれ，かつ，1単位に必要な学習時間を有するプログラムが対象となります．参加するプログラムの内容が専門分野の教育・研究を行う上で有益と認められるかの判断は，指導教員が行いますので，指導教員とは十分に相談すること。また，単位の取得には，プログラム実施機関が発行する修了証等，定められた教育・研修等を完了したことを証明する資料の提出が必須です．プログラム実施機関が修了証等を発行するか予め確認すること。 ■　ＷＥＢページ 海外留学に対する諸注意事項については，下記ULRを参照すること。 http://www.cicee.tokushima-u.ac.jp/	2．それぞれの機関において，要求される研修内容を研修すること。 3．研修は，それぞれの機関において15時間以上を行うものとする。 4．研修のポートフォリオとレポートを提出すること。 5．帰国後，報告会において研修内容を報告すること。 ■　教科書 ■　参考書 ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 研修のレポートおよびポートフォリオに基づいて評価する。 ■　受講者へのメッセージ 本授業は，外国大学，外国研究機関および海外企業に1週間以上留学することにより，所定の手続きを経て単位を認定される。 ■　ＷＥＢページ 海外留学に対する諸注意事項については，下記ULRを参照すること。 http://www.cicee.tokushima-u.ac.jp/

■　オフィスアワー ■　備考	■　オフィスアワー ■　備考

（是正事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M），臨床心理学専攻（M），理工学専攻（M），生物資源学専攻（M）

７．（３）到達目標に挙げている内容が，シラバスの授業の概要や授業計画を見ても身に付けることができるのか不明であるため，到達目標に対してどのようにして身に付けるのかを具体的に説明するか，到達目標について改めること。

（対応）

以下の内容により「シラバス（授業計画）」に記載する。

専門分野の講義や実習等を，外国大学において一定時間以上受講することによって，海外の研究動向等の実情や実態を把握するとともに，現地の教員・研究者・学生との交流を通してコミュニケーション能力の向上を図る，という目標が明確になるように，到達目標を「専門分野の先端研究を学修し，海外の研究動向や海外における現場・業界の実情・実体について理解を深めること。専門分野の先端研究を理解し，外国人とのコミュニケーション力を身につけること。」に改める。

これにあわせ，授業の概要も「海外で開講される短期集中コースのうち，先端研究等，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が１単位に必要な時間数を有するプログラムに参加し，専門分野において高度な知識を修得したと評価した時に単位を認定するものであること。知識の修得の評価は，外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を行い，それらの内容を総合的に評価して行うこと。」に改める。

また，到達目標に掲げた知識・能力をどのようにして身に付けるのかが具体的になるように，授業計画の欄に，プログラムの内容とレベル，時間数，実施形態，必要な成果物，報告会に関する具体的な事項を加筆する。併せて，成績評価方法・基準の欄を「外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を総合的に評価して行う。」と具体的なるように加筆する。

（新旧対照表）シラバス（授業計画）（11 ページ）

新	旧
■　授業科目名 グローバルコミュニケーションＣ ■　科目分野 研究科共通科目　グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 安澤　幹人（Mikito Yasuzawa），コインカー　パンカジ（Koinkar Pankaj） ■　授業形態	■　授業科目名 グローバルコミュニケーションＣ ■　科目分野 研究科共通科目　グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 安澤　幹人（Mikito Yasuzawa），コインカー　パンカジ（Koinkar Pankaj） ■　授業形態

講義と演習 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 通年（集中） ■　対象学生・学年 １・２年次 ■　授業の目的 　この授業は，外国大学や外国研究機関等に出向き，海外で開講される先進の研究内容を有する集中講義（研修）を受けることにより，国際的な視野を持って先端研究に関する理解を深める。また，専門分野の海外応用事例を学修することにより，グローバルに展開できる専門知識の育成を図ることを目的とする。 ■　授業の概要 　本講義は，海外で開講される短期集中コースのうち，先端研究等，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が 1 単位に必要な時間数を有するプログラムに参加し，専門分野において高度な知識を修得したと評価した時に単位を認定するものである。知識の修得の評価は，外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を行い，それらの内容を総合的に評価して行う。 ■　キーワード 　海外留学，異文化・多文化教育，国際センスの涵養，先端研究の理解 ■　先行科目 ■　関連科目 ■　到達目標 １. 専門分野の先端研究を学修し，海外の研究動向や海外における現場・業界の実情・実体について理解を深める。 ２. 専門分野の先端研究を理解し，外国人とのコミュニケーション力を身につける。	講義と演習 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 通年（集中） ■　対象学生・学年 １・２年次 ■　授業の目的 　この授業は，外国大学に出向き，外国大学で開講される先端技術・科学に関する英語による集中講義（研修）を受けることにより，その国の先端技術・科学に関する理解を深め，専門的知識に加え科学・技術の応用事例を学修しながら実用的な知識の育成を図ることを目的とする。 ■　授業の概要 　外国大学で開講される英語による短期集中コースに参加し，英語により先端技術・科学に関する専門的知識に加え，科学・技術の実用的な知識を修得した時に単位を認定するものである。 ■　キーワード 　海外留学，異文化・多文化教育，国際センスの涵養，先端技術・科学の理解 ■　先行科目 ■　関連科目 ■　到達目標 １. 先端技術・科学に関する専門的内容を学修し，外国の技術動向や産業の実情について理解を深める。 ２. 先端技術・科学に関する専門的内容を理解し，英語によるコミュニケーション力を身に

	つける。
■　授業の計画 1．外国大学，外国研究機関等において実施される短期集中コース・研修が，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益な内容を有する講義，演習，実験及び実習等の学習時間が1単位に必要な時間数を有するプログラムであることが確認できる資料を提出すること。（1単位に必要な学習時間は，講義・演習については15時間から30時間，実験・実習等については，30時間から45時間である。）	■　授業の計画 1．外国大学，外国研究機関および海外企業に1週間以上留学すること。
2．プログラム実施機関において，定められた教育・研修等を完了すること。	2．それぞれの機関において，要求される研修内容を研修すること。
3．プログラム実施機関が発行する修了証等，定められた教育・研修等を完了したことを証明する資料を提出すること。	3．研修は，それぞれの機関において15時間以上を行うものとする。
4．教育・研修等のポートフォリオとレポートを提出すること。	4．研修のポートフォリオとレポートを提出すること。
5．帰国後，学内で開催する報告会において学修内容を報告すること。	5．帰国後，報告会において研修内容を報告すること。
■　教科書	■　教科書
■　参考書	■　参考書
■　教科書・参考書に関する補足情報	■　教科書・参考書に関する補足情報
■　成績評価方法・基準 外国で受講した先端研究に関する教育・研修等のポートフォリオとレポート，並びに，帰国後に学内で開催する報告会における発表を総合的に評価して行う。	■　成績評価方法・基準 研修のレポートおよびポートフォリオに基づいて評価する。
■　受講者へのメッセージ 本授業は，外国大学や外国研究機関等，海外で実施される短期集中コース・研修のうち，高度な専門分野の教育・研究を行う上で有益と認めまれ，かつ，1単位に必要な学習時間を有するプログラムが対象となります．参加するプログラムの内容が専門分野の教育・研究を行う上で有益と認められるかの判断は，指導教員が行いますので，指導教員とは十分に相談すること。また，単位の取得には，プログラム実施機関が発行	■　受講者へのメッセージ 本授業は，外国大学，外国研究機関および海外企業に1週間以上留学することにより，所定の手続きを経て単位を認定される。

する修了証等，定められた教育・研修等を完了したことを証明する資料の提出が必須です．プログラム実施機関が修了証等を発行するか予め確認すること。 ■　ＷＥＢページ 海外留学に対する諸注意事項については，下記ULRを参照すること。 http://www.cicee.tokushima-u.ac.jp/ ■　オフィスアワー ■　備考	■　ＷＥＢページ 海外留学に対する諸注意事項については，下記ULRを参照すること。 http://www.cicee.tokushima-u.ac.jp/ ■　オフィスアワー ■　備考

（是正事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M），臨床心理学専攻（M），
生物資源学専攻（M）

８．＜科目の水準が不適切＞ 一部の科目において修士課程の教育として相応しい内容・水準になっているか不明確なため，以下の点について説明するか改めること。【生物資源学専攻及び臨床心理学専攻と共通】 （１）「グローバルコミュニケーションA」について，諸アクターの話を聞くだけで，修士課程相当の教育が担保されていることを明確に説明すること。

（対応）

大学院修士課程の教育では，より高度で専門的な知識・技能（能力）を修得させるような授業の内容・水準が求められる。

「グローバルコミュニケーションA」については，以下のような授業形態をとることで修士課程相当の教育が担保されていることを，シラバス，及び授業科目の概要の中で示した。

１）外国人ゲストスピーカーの講義の後，主に英語を用いて当教員・ゲストスピーカー・学生が共同で，徳島の文化・自然情報の発信，徳島における多文化共生の推進等をテーマとして討議を進めるが，担当教員はそれぞれの専門分野（英語教育法，日本語教育法）の高度な知見を踏まえながら，英語コミュニケーション・討議能力の向上を図る適切な授業運営を行い，異文化・地域文化に対するゲストスピーカー／受講者の間の相互理解を深めるとともに，英語による高度な水準のコミュニケーション・討議能力の向上を図る。

２）第１回の授業で担当教員が異文化理解の専門的な理論（方法論）の検討，及び関連文献リストの提示等を行い，第２～７回のゲストスピーカーによる講義，さらには関連文献を読んだ上で，最終回（第８回）の授業では，受講者は講義内容と文献に書かれた理論的な問題を関連づけることが求められる。また，講義の中で扱われた話題と文献とを関連させ，英語で２千語または日本語で３千字のレポートを作成，提出させる。このような教授方法をとることで，受講生に英語教育学・日本語教育学の高度な専門性を踏まえた異文化理解の方法論（理論）を理解させるとともに，理論と事例を結びつけた分析を行わせることで，高度な論理的思考力の養成を図る。

（新旧対照表）授業科目の概要（2 ページ）

新	旧
(2 ページ) 本授業では，徳島在住の外国人ゲストスピーカーを招き，徳島や自国の文化や科学技術，さらには異文化間コミュニケーション，多文化共生，文学，スポーツなどをテーマとした講義をしてもらい，その後，担当教員・ゲストスピーカー・学生が共同で討議を進めることを通じて，徳島に在住することの利点や，徳島から世界に向けてどのような情報を発信できるかをともに考える。この授業は，国際語としての英語の高度なス	(2 ページ) 徳島から世界に向けてどのような文化や自然，科学技術を発信できるかを共に考える。また，海外から徳島に来訪する人々の要望に我々がいかに対応できるかを考える。学内外から徳島在住の世界各国の外国人をゲストスピーカーとして招き，徳島に在住することの利点や，それらを我々がいかにして世界に紹介すべきかを尋ねる。また，異文化間のコミュニケーションや多文化共生，科学技術や視覚芸術，自然やスポーツ

キルを受講生が培うために，主に英語で行なわれる。なお，担当教員は，それぞれの専門分野（英語教育，日本語教育）の知見を生かしながら授業を進行する。	などに関してレクチャーをして頂く。受講生は少人数グループでのディスカッションへ参加する。この授業は，国際語としての英語のスキルを受講生が培うために，主に英語で行なわれる。

（新旧対照表）シラバス（7 ページ）

新	旧
（7 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 グローバルコミュニケーションＡ ■　科目分野 研究科共通科目（グローバル教育科目群） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記）メリディス ・スティーヴンズ （StephensMeredith）　ゲールツ・三隅友子 （Tomoko Gehrtz-Misumi） ■　授業形態 講義 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 全専攻　１年 ■　授業の目的 徳島在住の外国人ゲストスピーカー（教授，教師，作家等の専門家）に，徳島や自国の文化や文学，スポーツなどに関する話題提供をしてもらい，主に英語により担当教員・ゲストスピーカー・学生で討議を行うことを通じて，英語による高度なコミュニケーション能力の向上，異文化理解にかかる専門的な理論（方法論）に基づく，多文化共生につながるグローバルな視点やものの見方の獲得，さらには徳島の地域文化等に対する理解の深化を図るとともに，文化交流を通	（7 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 グローバルコミュニケーションＡ ■　科目分野 研究科共通科目（グローバル教育科目群） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記）　メリディス ・スティーヴンズ（Stephens Meredith） ゲールツ・三隅友子（Tomoko Gehrtz-Misumi） ■　授業形態 講義 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 全専攻　１年 ■　授業の目的 グローバルな視点や物の考え方を提供するための基礎教育

じてゲストスピーカーの出身国との関係を深める。 The aims are to foster the students' ability to communicate in English, to acquire a global point of view that will lead to developing a multicultural society, to understand regional culture and society in Tokushima, and to strengthen the relationships with the countries of the expatriate residents by promoting cultural exchange. The students will listen to lectures of the expatriate residents from diverse backgrounds. The themes will be local culture, literature, and sport in Tokushima and in their own countries. After the lecture the students, the instructors, and the guest speakers will discuss the relevant issues, mainly in English.	To promote the local culture in Tokushima, and to identify what Tokushima can offer the world. To promote intercultural understanding by listening the experiences of expatriate residents from diverse backgrounds. To strengthen relationships with the countries of the expatriate residents by promoting cultural exchange. To learn about the regions where the expatriate residents come from directly, from real people, rather than online or from mainstream media.
■　授業の概要 本授業では，徳島在住の外国人ゲストスピーカーを招き，徳島や自国の文化や科学技術，さらには異文化間コミュニケーション，多文化共生，文学，スポーツなどをテーマとした講義をしてもらい，その後，担当教員・ゲストスピーカー・学生が共同で討議を進めることを通じて，徳島に在住することの利点や，徳島から世界に向けてどのような情報を発信できるかをともに考える。この授業は，国際語としての英語の高度なスキルを受講生が培うために，主に英語で行なわれる。なお，担当教員は，それぞれの専門分野（英語教育，日本語教育）の専門的知見を生かしながら授業を進行する。 We will discuss what aspects of local culture, and technology in Tokushima could be introduced to the rest of the world. We will invite some international residents who are living in Tokushima to	■　授業の概要 徳島から世界に向けてどのような文化や自然，科学技術を発信できるかを共に考える。また，海外から徳島に来訪する人々の要望に我々がいかに対応できるかを考える。学内外から徳島在住の世界各国の外国人をゲストスピーカーとして招き，徳島に在住することの利点や，それらを我々がいかにして世界に紹介すべきかを尋ねる。また，異文化間のコミュニケーションや多文化共生，科学技術や視覚芸術，自然やスポーツなどに関してレクチャーをして頂く。受講生は少人数グループでのディスカッションへ参加する。この授業は，国際語としての英語のスキルを受講生が培うために，主に英語で行なわれる。 We will discuss what aspects of local culture, nature, and technology in Tokushima could be introduced to the rest of the world. Also, we will consider how we can

participate as guest speakers. We will ask them about the advantages of living in Tokushima, and how we could present these advantages to the rest of the world. We will ask them to give lectures on cross-cultural communication, multicultural coexistence, literature, and sport. Students will participate in discussions with the instructors and guest speakers in small groups. This course will be conducted mainly in English, in order to foster the students' ability in English as an International Language. The instructors will make full use of their specialties, i.e. second language acquisition and Japanese language education. ■　キーワード グローバルコミュニケーション・多文化共生・対話 ■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 ・在住外国人を通して，徳島が置かれている多文化共生の状況を知る。 ・徳島及び四国が日本のモデルとして世界に発信できるものを確認する。 ・異文化理解に関する理論に基づく多文化共生を推進する人材としての構えと，英語による高度なコミュニケーションスキルを獲得する。 ■　授業の計画 1. Introduction to the lectures. a) Explanation of theoretical issues in developing cross-cultural understanding. b) Provision of reading list. c) Explanation of final assignment. Students must complete a 2,000-word essay in	better address the needs of overseas visitors. We will invite some international residents who are living in Tokushima to participate as guest speakers. We will ask them about the advantages of living in Tokushima, and how we could present these advantages to the rest of the world. We will ask them to give lectures on cross-cultural communication, multicultural coexistence, technology, visual art, nature, and sport. Students will participate in discussions in small groups. This course will be conducted mainly in English, in order to foster the students' ability in English as an International Language. ■　キーワード グローバルコミュニケーション・多文化共生・対話 ■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 ・在住外国人を通して，徳島が置かれている多文化共生の状況を知る。 ・徳島及び四国が日本のモデルとして世界に発信できるものを確認する。 ・多文化共生を推進する人材としての構えと英語によるコミュニケーションスキルを獲得する。 ■　授業の計画 1. An African family's experience in Tokushima

English or 3,000-figures essay in Japanese, connecting the literature with the topics addressed during the lectures. 各レクチャーへのイントロダクションを行う。ａ）異文化間の理解を深めるための理論的な問題点の説明。ｂ）文献リストの提供。ｃ）最終試験の説明。受講者はレクチャーの中で扱われた話題と文献とを関連させ，英語で２千語または日本語で３千字のレポートを書くこと。	
2. Lecture on “An insider’s view of the legacy of colonization” by an African teacher in Tokushima, followed by a group discussion and questions. 徳島在住のアフリカ人教師によるレクチャー「関係者の視点で見る植民地主義が遺したもの」とグループでの討論ならびに質疑応答。	2. An Indian family’s experience in Tokushima
3. Lecture on “Building bridges between India and Tokushima” by an Indian teacher in Tokushima, followed by a group discussion and questions. 徳島在住のインド人教師によるレクチャー「インドと徳島にかける橋」とグループでの討論ならびに質疑応答。	3. An American author introduces her works of fiction set in Tokushima
4. Lecture on “Writing English novels set in Tokushima” by an American author in Tokushima, followed by a group discussion and questions. 徳島在住のアメリカ人作家によるレクチャー「徳島を舞台にして書く英語小説」とグループでの討論ならびに質疑応答。	4. Korean students’ perspectives of studying in Tokushima
5. Lecture on “Slovenian culture, language and literature” by a Slovenian lecturer in Tokushima, followed by a group discussion and questions. 徳島在住のスロベニア人講師によるレクチャー「スロベニアの文化，言語，文学」とグループでの討論ならびに質疑応答。	5. An American sportsman’s experience of power-lifting in Tokushima

6. Lecture on “Carrying a torch of peace and reconciliation into the future: My activities as the grandson of a former British prisoner of war.” by a Canadian professor in Tokushima, followed by a group discussion and questions. 徳島在住のカナダ人教授によるレクチャー「平和と和解というトーチを将来へ運ぶ: 元イギリス人捕虜の孫である私の活動」とグループでの討論ならびに質疑応答。 7. Lecture on “Building Bridges in the Tokushima community through sport” by an American sportsman in Tokushima, followed by a group discussion and questions. 徳島在住のアメリカ人アスリートによるレクチャー「スポーツを通じて徳島の地域社会にかける橋」とグループでの討論ならびに質疑応答。 8. Review of the lectures by the visiting speakers. Students will be asked to make connections between theoretical issues in the literature with the content of the lectures. 各ゲストスピーカーによるレクチャーの振り返り。受講者はレクチャーの中で扱われた内容と文献に書かれた理論的な問題とを関連づけることが求められる。 ■　教科書 教科書は使用しない。ゲストスピーカーからの資料の提示及び各テーマに沿った参考文献や情報を提供する。 ■　参考書 授業中に直接紹介する。 ■　教科書・参考書に関する補足情報 無 ■　成績評価方法・基準 授業への取り組み状況，テーマごとのレポートの成績，最終的に課す総合的なレポートの成績を総合的に評価する。	6. A Slovenian professor’s introduction to her country 7. Swedish students’ perspectives of studying in Tokushima 8. Chinese students’ experiences of studying in Tokushima ■　教科書 教科書は使用しない。ゲストスピーカーからの資料の提示及び各テーマに沿った参考文献や情報を提供する。 ■　参考書 授業中に直接紹介する。 ■　教科書・参考書に関する補足情報 無 ■　成績評価方法・基準 授業への取り組み状況，テーマごとのレポートの成績，最終的に課す総合的なレポートの成績を総合的に評価する。

■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 受講者は最大 40 人とする。授業は，外国人ゲストスピーカーによる講義，および教員・ゲストスピーカー・受講者をまじえたディスカッションにより構成される。テーマとゲストスピーカーごとに，事前学習，講義そして振り返りを行う。 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー メリディス・スティーヴンズ（Meredith Stephens）　金曜 14:35-16:05 三隅 友子（Tomoko Misumi）月曜午後（事前に連絡してください） ■　備考 無	■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 受講者は最大 40 人とし，講義を聞くことと受講者同士のディスカッションを行う。テーマとゲストスピーカーごとに，事前学習，講義そして振り返りを行う。 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー メリディス・スティーヴンズ（Meredith Stephens）　金曜 14:35-16:05 三隅 友子（Tomoko Misumi）月曜午後（事前に連絡してください） ■　備考 無

（是正事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M），臨床心理学専攻（M），
生物資源学専攻（M）

８．（２）「国際協力論」について，諸アクターが説明をする際に，内容の担保がなされているのか説明すること。

（対応）

「国際協力論」の授業に招聘するゲスト講師は，JICA の国際協力専門員として経験を重ねてきた第一人者であり，実務家教員として大学での講義にも耐えられる経験を有している。また，この授業は担当の専任教員によって計画・実施される。ゲスト講師による講義は，その回の授業の「教材」として用いられ，ゲスト講師による講義がおこなわれる回についても，教授すべき知識について担当教員が講義した上で，その回の内容に関わる具体的な事例をゲスト講師に解説させる。そのうえで，教員，学生，ゲスト講師による討議をおこなう。

このように，ゲスト講師の学術的水準，及び担当教員が高度に専門的な立場から講義を行った上で，ゲスト講師による事例の紹介と討議を行うという授業形式の両面において，本授業は修士課程の教育として相応しい内容・水準となっている。

以上の点を踏まえ，シラバスの「授業の概要」欄に，「担当教員が基本的な知識について解説したうえで，開発援助の実例として，JICA の国際協力専門員が実施している技術移転プロジェクトの内容についての講義をおこない，その後，担当教員による指導のもとで，国際協力専門員と学生による討論を行う」という，修士課程水準の授業の質を担保するための授業の進め方について明記する。また，シラバスの修正に合わせ，「授業科目の概要」の修正を行う。

（新旧対照表）授業科目の概要（１ページ）

新	旧
（１ページ） この授業の目的は，途上国において農学・工学的な技術移転プロジェクトを設計・マネジメントする際に必要な知識とスキルを身につけることにある。それを通じてエンジニアが技術を海外に移転する際に想定される困難やその解決方法を学ぶ。そのために，専任教員の講義により開発学の基礎知識を理解したうえで，JICA からゲストスピーカー（国際協力専門員）を招聘し，JICA によるアジア・アフリカ地域を対象にした農村開発やインフラ開発を中心とする技術移転の具体例を検討する。その後，担当教員による指導のもとで，国際協力専門員と学生による討論をおこなう。そして途上国を対象にした開発援助に限らず，ひろくグローバルな状況のなかで技術を社会実装する際	（１ページ） この授業の目的は，途上国において農学・工学的な技術移転プロジェクトを設計・マネジメントする際に必要な知識とスキルを身につけることにある。それを通じてエンジニアが技術を海外に移転する際に想定される困難やその解決方法を学ぶ。そのために，開発学の基礎知識を理解したうえで，JICA 四国からゲストスピーカーを招聘し，JICA によるアジア・アフリカ地域を対象にした農村開発やインフラ開発を中心とする技術移転の具体例を検討する。そして途上国を対象にした開発援助に限らず，ひろくグローバルな状況のなかで技術を社会実装する際に必要な社会科学的知識やスキルを身につけたエンジニアを養成する。

に必要な社会科学的知識やスキルを身につけたエンジニアを養成する。	

（新旧対照表）シラバス（3 ページ）

新	旧
（3 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 国際協力論 ■　科目分野 グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 内藤　直樹（Naoki Naito） 饗場　和彦（Kazuhiko Aiba） ■　授業形態 講義 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 全専攻　１年 ■　授業の目的 この授業の目的は，環境・歴史・文化・社会・経済的なコンテクストが先進国と大きく異なる途上国において，おもに農学・工学分野における技術移転プロジェクトを設計・マネジメントする際に必要な知識とスキルを身につけることにある。それを通じてエンジニアが，文化を異にする海外の諸地域に技術を移転する際に想定される困難やその解決方法を学ぶ。 ■　授業の概要 ①開発学や開発援助の現場におけるニーズを把握するために必要な人類学や社会学の基礎知識を理解したうえで，② JICA によるアジア・アフリカ地域を対象にした農村開発・インフラ開	（3 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 国際協力論 ■　科目分野 グローバル教育科目群 ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 内藤　直樹（Naoki Naito） 饗場　和彦（Kazuhiko Aiba） ■　授業形態 講義 ■　単位数 １単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 全専攻　１年 ■　授業の目的 この授業の目的は，環境・歴史・文化・社会・経済的なコンテクストが先進国と大きく異なる途上国において，おもに農学・工学分野における技術移転プロジェクトを設計・マネジメントする際に必要な知識とスキルを身につけることにある。それを通じてエンジニアが，文化を異にする海外の諸地域に技術を移転する際に想定される困難やその解決方法を学ぶ。 ■　授業の概要 開発学の基礎知識を理解したうえで，② JICA によるアジア・アフリカ地域を対象にした農村開発・インフラ開発等を中心とする技術移転の具体例を検討する。そして途上国を対象にした

発等を中心とする技術移転の具体例を検討する。そして途上国を対象にした開発援助に限らず，ひろくグローバルな状況のなかで技術を社会実装する際に必要な社会科学的知識やスキルを身につけたエンジニアを養成する。なお，①は総合科学部教員による講義，②はJICAから招聘する国際協力専門員による講義にもとづく。 また，①は第1～3，8回，②は第4～7回である。②については，担当教員が基本的な知識について解説したうえで，開発援助の実例として，JICA の国際協力専門員が実施している技術移転プロジェクトの内容についての講義をおこなう。その後，担当教員による指導のもとで，国際協力専門員と学生による討論をおこなう。 ■　キーワード 文化人類学，地域研究，開発援助，技術移転，社会実装，参加型開発 ■　先行科目 無 ■　関連科目 グローバル文化特論 ■　到達目標 ・文化を異にする地域に技術移転する際には，その技術を受容する社会の文脈理解が必要であるということを理解する。 ・グローバルな状況のなかで技術を社会実装する際に必要な社会科学的知識やスキルを身につける。 ■　授業の計画 １．開発援助と技術移転：文化人類学からのアプローチ ２．国際協力に関わる諸アクター ３．国際協力に関わるキャリア ４．防災プロジェクトの事例 ５．インフラ開発プロジェクト（上水道）の事例 ６．インフラ開発プロジェクト（土木）の事例 ７．気候変動に対応する開発援助の事例	開発援助に限らず，ひろくグローバルな状況のなかで技術を社会実装する際に必要な社会科学的知識やスキルを身につけたエンジニアを養成する。なお，①は総合科学部教員，②はJICA四国から招聘するゲスト講師が行う。 ■　キーワード 文化人類学，地域研究，開発援助，技術移転，社会実装，参加型開発 ■　先行科目 無 ■　関連科目 グローバル文化特論 ■　到達目標 ・文化を異にする地域に技術移転する際には，その技術を受容する社会の文脈理解が必要であるということがわかる。 ・グローバルな状況のなかで技術を社会実装する際に必要な社会科学的知識やスキルを身につける。 ■　授業の計画 １．開発援助と技術移転：文化人類学からのアプローチ ２．国際協力に関わる諸アクター ３．国際協力に関わるキャリア ４．農村開発プロジェクトの事例 ５．社会林業プロジェクトの事例 ６．インフラ開発プロジェクトの事例：道路 ７．インフラ開発プロジェクトの事例：エネルギー

８．総括授業：グローバルな状況における技術と知識のマネジメント ■　教科書 教科書は使用しない。毎回，授業中にプリントを配布する。 ■　参考書 内藤直樹・山北輝宏 2014 『社会的包摂／排除の人類学：難民・開発・福祉』昭和堂 ■　教科書・参考書に関する補足情報 無 ■　成績評価方法・基準 本授業の成績は，授業への取り組み状況と，期末レポートの成績をあわせて総合的に評価する。成績評価の割合の目安は，授業への取り組み状況（70%），期末レポートの成績（30%）とする。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 無 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー 月曜 12:00-12:50 ■　備考 無	８．総括授業：グローバルな状況における技術と知識のマネジメント ■　教科書 教科書は使用しない。毎回，授業中にプリントを配布する。 ■　参考書 内藤直樹・山北輝宏 2014 『社会的包摂／排除の人類学：難民・開発・福祉』昭和堂 ■　教科書・参考書に関する補足情報 無 ■　成績評価方法・基準 本授業の成績は，授業への取り組み状況と，期末レポートの成績をあわせて総合的に評価する。成績評価の割合の目安は，授業への取り組み状況（70%），期末レポートの成績（30%）とする。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 無 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー 月曜 12:00-12:50 ■　備考 無

（是正事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M）

９．＜科目の内容が不明確＞ 専門科目や教育クラスター科目を「地域系科目」及び「グローバル系科目」と区分しているが，シラバスの授業の目的，授業の概要及び授業の計画が当該区分を反映した記載になっていない科目が見受けられる。例えば「日本文化特論」について「日本の小説家の作品が西洋でどのように受け入れられてきたかを考えるのが本講義のテーマの一つ」としながらも，授業の計画では作品名を列挙しているに過ぎず，どの様に「グローバルな視点から日本文化及び日本文学の本質を理解する」のか不明確であるため，シラバス及び授業科目の概要の記載を必要に応じて改めること。

（対応）

専攻専門科目のシラバス及び「授業科目の概要」の再点検を踏まえ，「地域系科目」「グローバル系科目」という授業区分の位置づけと，各授業の目的・概要・計画等が整合性を持つように，シラバス及び「授業科目の概要」の修正を行った。具体的に修正を行ったのは，「経済学特論」「アート表現特論」「映像デザイン特論」「日本歴史文化特論」「健康科学特論」（以上，地域系科目）「グローバル文化特論」「応用倫理学特論」「日本言語文化特論」「日本文化特論」（以上，グローバル系科目）の９科目で，うち，「健康科学特論」「日本言語文化特論」「日本文化特論」の３科目については「授業科目の概要」の修正も行った。以下，ご指摘のあった「日本文化特論」の例を最初に示す形で，科目ごとに主要な修正点を記す。なお，具体的な修正内容については新旧対照表により示した。

■日本文化特論

「グローバル系科目」としての位置づけを踏まえ，とくに「グローバルな視点からの日本文学，日本文化理解」という視点に留意しつつ，シラバスの「授業の目的」「授業の概要」「到達目標」「授業の計画」，及び「授業科目の概要」を修正した。

「授業の目的」については，「グローバルな視点から，日本文学，特に小説と日本文化について理解を深めることにある。」ことを明示した。「到達目標」も，この授業の目的に対応する形で，「グローバルな視点から日本文学と日本文化を再考できる。」とした。「授業の概要」では，現代日本文学（村上春樹の作品等）を題材として多面的な観点から研究を進めること，「日本の小説家の作品が西洋でどのように受け入れて来られたか」という観点については，「村上春樹の小説の翻訳の問題や空間感覚，外国でも通じる国際的な文体などの研究を通して考察する」ことを明記した。「授業の計画」は，村上春樹以外の現代の日本文学作品も取り上げつつ，空間理論，ポストコロニアル理論等の文学理論を踏まえ，日本文学作品の海外受容の問題も含めグローバルな視点から作品の分析を行い，第15回の「まとめ」の回では，それまでの講義内容を踏まえ，グローバル化の中の日本文学，日本文化の特質を検討するという形に修正した。

「授業科目の概要」については，シラバスの「授業の概要」の修正内容を反映させる形で修正した。

■経済学特論

「地域系科目」としての位置づけを踏まえ，理論面にとどまらず，マクロ経済学と地域経済・産業との関連を論じる講義回を入れるようにシラバスを改変した。具体的には，シラバスの「授業の概要」において，「社会や地域における経済や産業の基本構造およびその開発・発展について，経済学の手

法を用いて考察する。」ことを明示した上で，「授業の計画」の第１回目を「マクロ経済学と地域経済・産業の発展」とし，マクロ経済学と地域経済・産業の発展の関係性を整理した上で，第２回目以降は理論を踏まえた経済データの解析法を教授し，第15回目にあらためて「マクロ経済学を通した地域開発を展望する」としてマクロ経済学の地域開発への応用課題について論じる形とした。

■アート表現特論

「地域系科目」としての位置づけを踏まえ，本授業がメディアアート表現の観点から地域づくりに貢献できる人材を養成することを目指した授業であることを，シラバスの「授業の概要」「キーワード」「到達目標」「授業の計画」欄に明記した。

■映像デザイン特論

「地域系科目」としての位置づけを踏まえ，映像デザイン分野の専門知識・技能の修得とともに，映像を活用して地域課題の解決に寄与できる能力を養成することが授業の目的であることを，シラバスの「授業の目的」欄に明示した。映像を活用した実践的な地域課題解決プロジェクトの具体例として，「授業の目的」「授業の概要」「キーワード」欄に「公共広告」を挙げた。「授業の計画」では，各回の授業内容を具体的に記し，「地域課題解決の手法としての映像デザイン」という観点を踏まえ授業が進められることを示した。

■日本歴史文化特論

「地域系科目」としての位置づけを踏まえ，とくに歴史（地域史）研究と地域創成のつながりという観点から，シラバスの「授業の目的」「授業の計画」を修正した。具体的には，「授業の目的」において，「比較地域史的な視点から，地域文化史を再発見し，徳島県の事例も踏まえつつ，歴史文化資源を生かした「地域創成」の可能性を探る。」ことを明記した上で，「授業の計画」において，徳島市内の考古・歴史遺産のフィールドワークを通して，地域の歴史文化資源の保存と活用の実態を，第１～13回で修得した日本史・考古学（地域史）の知識も踏まえ理解する回，地域史の再認識の重要性と，地域史研究に基づく地域創成の可能性を総括的に論じる回を設定し，地域史に関する専門知識と，歴史文化資源の保存・活用の現場を接続させるようにした。

■健康科学特論

「地域系科目」としての位置づけを踏まえ，とくに地域住民／地域の健康課題解決との関係に留意しつつ，シラバスの「授業の目的」「授業の概要」「キーワード」「到達目標」「授業の計画」，及び「授業科目の概要」を修正した。

「授業の目的」では，高齢社会における地域住民のQuality of Lifeの充実，過度なスポーツによる関節等の損傷の増加という地域・社会的背景を示した上で，本授業では，超音波診断装置の解析手法を中心として，スポーツ医学の理論・技法を地域住民の健康課題の解決に活用する能力の養成を目指すことを明示した。「授業の概要」では，上記の「授業の目的」に対応した形で，超音波装置を用いた研究手法について基礎知識を身につけ，さらに骨格筋と関節に関する研究内容を発表・論議することで超音波装置による解析法や各自の研究についての理解を深めるとともに，若年から高齢者に至

る地域住民のQuality of Lifeに関わる健康課題の解決法を検討する内容となることを述べた。「キーワード」には，地域住民／地域の健康課題の解決という観点から，「健康維持」「疾病予防」を追記した。また主たる解析対象として「関節」を加えた。「到達目標」には，「地域における健康課題への取り組み方とその具体例について学ぶ。」ことを追記した。「授業の計画」では，第1回目のガイダンスで「地域における健康課題」の論点整理を行うとともに，その後の授業の中で超音波装置による解析とQOL向上との関係に適宜触れ，第14回の授業では，スポーツ医学の知見を活用した地域健康課題解決への取り組み方について，それまでの講義内容を踏まえ討議を行う形とし，講義内容と「地域住民／地域の健康課題解決」という主題を明確に関連づけるようにした。

「授業科目の概要」についても，地域住民／地域の健康課題解決という本講義の目的を踏まえ，「若年から高齢者に至る地域住民のQuality of Lifeに関わる健康課題を確認し，解決への取り組み方を検討する。」という一文を追記した。

■グローバル文化特論

「グローバル系科目」としての位置づけを踏まえ，シラバスの「授業の目的」「授業の概要」（グローバル化の現状と関連課題の解決策の検討）と整合性を持つように，「授業の計画」15回分の内容を修正した。

■応用倫理学特論

「グローバル系科目」としての位置づけを踏まえ，シラバスの「授業の概要」欄に，「持続可能な開発目標（SDGs）への取り組みが国際的に求められている中，環境倫理学を中心とする応用倫理学の知識に裏打ちされた思考力は，グローバル化社会の中で必須である。」との文言を付加した。また，「授業の計画」について，15回分の授業内容の詳細を示した。

■日本言語文化特論

「グローバル系科目」としての位置づけを踏まえ，「グローバル時代における日本文学研究の意義」という観点を，シラバスの「授業の概要」「授業の計画」に追記した。「授業の概要」については，「人・言語・文化の交流に留意しつつ」日本古典文学及び日本近現代文学の各領域について講じる形に，「授業の計画」については，第1回目に「グローバル時代における日本文学研究の意義と方法」という観点からガイダンスを行い，第7回，第15回の各担当者の授業の最終回には，日本古典文学，日本近現代文学それぞれのグローバル時代における意義と方法をあらためて確認する回を設けた。

「授業科目の概要」については，シラバスの「授業の概要」「授業の計画」の修正内容を反映させる形で修正した。

（新旧対照表）授業科目の概要（17ページ）

新	旧
（17ページ） 授業科目名　日本文化特論	（17ページ） 授業科目名　日本文化特論

How are works of Japanese writers perceived in Western countries? This is one of the questions we will try to answer in this course. Schiedges will present aspects of modern Japanese literary culture (especially literary works of Murakami Haruki). In the course of studying the problems concerning translation, sense of space, international prose style, which have not been sufficiently treated in Japan, the students will be not only able to read, find and present reference material from the English-speaking academic world, but also understand the essence of Japanese culture and literature from a global point of view. 日本の小説家の作品が西洋でどのように受け入れて来られたかを考えるのが本講義のテーマの一つである。現代日本の文学（特に村上春樹の作品等）を読み解き，それぞれのテーマを選び研究する。従来の日本国内での村上春樹研究では十分解明できなかった彼の小説の翻訳の問題や空間感覚，外国でも通じる国際的な文体などの研究を通して，日本文化と日本文学をグローバルな視点から考察するとともに，受講生は英語で出版された参考文献を読解，収集し，プレゼンをすることができるようになる。	How are works of Japanese writers perceived in Western countries? This is one of the questions we will try to answer in this course. Schiedges will present aspects of Japanese literary culture from Meiji period to modern era (Japanese I-novel, fantastic literature, works of Murakami Haruki, etc.). Students are required to read, find and present reference material in English. 日本の小説家の作品が西洋でどのように受け入れて来られたかを考えるのが本講義のテーマの一つである。明治時代から現代までの日本の小説（私小説，幻想文学，村上春樹の作品等）を読み解き，それぞれのテーマを選び研究する。受講生は英語で参考文献を読解，収集し，プレゼンをすることが必須となる。

（新旧対照表）シラバス（97 ページ）

新	旧
(97 ページ) シラバス（授業計画） ■　授業科目名 日本文化特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（グローバル系科目） ■　選必区分	(97 ページ) シラバス（授業計画） ■　授業科目名 日本文化特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（グローバル系科目） ■　選必区分

選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） シートゲス・オラフ（Olaf Schiedges） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 The goal of this course is to make students fully understand different forms of Japanese literary and culture. We will read works of Japanese authors and analyze them. Spoken language will be English.　この授業の目的はグローバルな視点から，日本文学，特に小説と日本文化について理解を深めることにある。授業では文学作品を読んで分析する。講義での使用言語は英語とする。 ■　授業の概要 How are works of Japanese writers perceived in Western countries? This is one of the questions we will try to answer in this course. Schiedges will present aspects of modern Japanese literary culture (especially literary works of Murakami Haruki). In the course of studying the problems concerning translation, sense of space, international prose style, which have not been sufficiently treated in Japan, the students will be not only able to read, find and present reference material from the English-speaking academic world, but also understand the essence of Japanese culture and literature from a global point of view. 日本の小説家の作品が西洋でどのように受け	選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） シートゲス・オラフ（Olaf Schiedges） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 The goal of this course is to make students familiar with different forms of Japanese prose and literary genre. We will read works of Japanese authors and analyze them. Spoken language will be English! その授業の目的は日本文学，特に小説とそのあらゆるジャンルを身に着けること。授業で文学作品を読んで分析する。講義の使用言語は英語。 ■　授業の概要 How are works of Japanese writers perceived in Western countries? This is one of the questions we will try to answer in this course. Schiedges will present aspects of Japanese literary culture from Meiji period to modern era (Japanese I-novel, fantastic literature, especially works of Murakami Haruki). Students are required to read, find and present reference material in English. 日本の小説家の作品が西洋でどのように受け

入れて来られたかを考えるのが本講義のテーマの一つである。現代日本の文学（特に村上春樹の作品等）を読み解き，それぞれのテーマを選び研究する。従来の日本国内での村上春樹研究では十分解明できなかった彼の小説の翻訳の問題や空間感覚，外国でも通じる国際的な文体などの研究を通して，日本文化と日本文学をグローバルな視点から考察するとともに，受講生は英語で出版された参考文献を読解，収集し，プレゼンをすることができるようになる。 ■　キーワード Japanese culture, literature, history, English ■　先行科目 none／無 ■　関連科目 none／無 ■　到達目標 While reading works about literary theory and texts written by Murakami Haruki students acquire a certain awareness of the characteristics of modern Japanese literature, and reconsider Japanese culture and literature from a global point of view. 文学理論についてのテキストや村上春樹の作品を読みながら学生は現代日本の文学を中心とする文学的な知識と教養を修得し，グローバルな視点から日本文学と日本文化を再考できる。 ■　授業の計画 １.村上春樹の世界へのイントロダクション ２.村上春樹の海外での受け入れについて（Strecher, Matthew Carl） ３.村上春樹の海外での受け入れについて（Suter, Rebecca） ４.村上春樹の国際通用性（作家であり翻訳家であることについて）	入れて来られたかを考えるのが本講義のテーマの一つである。明治時代から現代までの日本の小説（私小説，幻想文学，特に村上春樹の作品）を読み解き，それぞれのテーマを選び研究する。受講生は英語で参考文献を読解，収集し，プレゼンをすることが必須となる。 ■　キーワード Japanese culture, literature, history, English ■　先行科目 none／無 ■　関連科目 none／無 ■　到達目標 While reading works about literary theory and texts written by Murakami Haruki students acquire a certain awareness of the characteristics of modern Japanese literature. Furthermore students will get an understanding of Japanese literature and culture in a global context. 文学理論についてのテキストや村上春樹の作品を読みながら学生は現代日本の文学を中心とする文学的な知識と教養を自分なりに修得すること。それに加えて学生はグローバルな視点から日本文化及び日本文学の本質を理解する。 ■　授業の計画 １.村上春樹の世界へのイントロダクション ２.村上春樹のデビュー作「風の歌を聞け」(1979)　(1) ３.村上春樹のデビュー作「風の歌を聞け」(1979)　(2) ４.村上春樹のデビュー作「風の歌を聞け」(1979)　(3)

5.村上春樹の国際通用性（文体のインターナショナル性について）	5.村上春樹の「羊をめぐる冒険」(1982) (1)
6.海外文学と理論について（ポストモダニズム）	6.村上春樹の「羊をめぐる冒険」(1982) (2)
7.村上春樹の『風の歌を聞け』(1979)と私小説のパロディ，ポストモダニズムについて	7.村上春樹の「ノルウェイの森」(1987) (1)
8.海外文学と理論について（ポストコロニアル理論）	8.村上春樹の「ノルウェイの森」(1987) (2)
9.村上春樹の『羊をめぐる冒険』(1982) とポストコロニアル理論について	9.村上春樹の「ノルウェイの森」(1987) (3)
10.現代文学における間テキスト性と間メディア性について	10.村上春樹の「世界の小和知とハードボイルド・ワンダーランド (1985) (1)
11.村上春樹の『ノルウェイの森』(1987) と間テキスト性について	11.村上春樹の「世界の小和知とハードボイルド・ワンダーランド (1985) (2)
12.村上春樹の『アフターダーク』(2004) と間メディア性について	12.村上春樹の「世界の小和知とハードボイルド・ワンダーランド (1985) (3)
13.現代文学における空間理論について	13.村上春樹の「アフターダーク」(2004) (1)
14.村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985) と空間理論について	14.村上春樹の「アフターダーク」(2004) (2)
15.まとめ～グローバル化のなかの日本文学・日本文化	15.まとめ
■　教科書 村上春樹の作品は図書館にある。以下の英語で出版された図書は Schiedges がコピーで提供する。 Suter, Rebecca: *The Japanization of Modernity. Murakami Haruki between Japan and the United States*. Harvard University Press, Cambridge and London, 2008 Strecher, Matthew, Carl: *The Forbidden World of Haruki Murakami*. University of Minnesota Press, Minneapolis, London, 2014	■　教科書 村上春樹の作品は図書館にある。
■　参考書 Will be announced in first lecture／最初の講義の際に発表する。	■　参考書 Will be announced in first lecture／最初の講義の際に発表される。
■　教科書・参考書に関する補足情報 Copies／コピーを使用する。	■　教科書・参考書に関する補足情報 Copies／コピー
■　成績評価方法・基準	■　成績評価方法・基準

レポート２回（各 30%，計 60%）：授業の出席，取り組み態度，宿題（計 40%） ■　再試験の有無 None／無 ■　受講者へのメッセージ Please repeat the content of every lecture／毎週授業の内容を復習しましょう。 ■　ＷＥＢページ None／無 ■　オフィスアワー 金曜 16:20-17:50 ■　備考 None／無	レポート (2)（各 30%，計 60%）授業の出席，取り組み態度，宿題（40%） ■　再試験の有無 None／無 ■　受講者へのメッセージ Please repeat the content of every lecture／毎週授業の内容を復習しましょう。 ■　ＷＥＢページ None／無 ■　オフィスアワー 金曜 16:20-17:50 ■　備考 None／無

（新旧対照表）シラバス（45 ページ）

新	旧
（45 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 経済学特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 趙　タン（ZHAO Tong） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的	（45 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 経済学特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 趙　タン（ZHAO Tong） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的

マクロ経済学の専門的知識の習得と，それを踏まえた実態経済の分析能力を身につけること。 ■　授業の概要 社会や地域における経済や産業の基本構造およびその開発・発展について，経済学の手法を用いて考察する。上級マクロ経済学の知識を身に着けるための講義である。毎回発表者が担当する章を輪読し，みんなで議論する。 ■　キーワード 上級マクロ経済学 ■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 最適成長理論を習得し，マクロ経済学に関連する英文ジャーナル論文を読めること。 ■　授業の計画 １．マクロ経済学と地域経済・産業の発展 ２．消費と投資：Ramsey モデル ３．消費と投資：分権型経済 ４．消費と投資：政府の役割 ５．消費と投資：開放経済 ６．重複世代モデル：２期間生存モデル ７．重複世代モデル：資本蓄積 ８．重複世代モデル：連続時間モデル ９．重複世代モデル：財政政策 10. 重複世代モデル：総貯蓄と利子率 11. 最適モデル：不確実性の下での消費行動 12. 最適モデル：不確実性の下での投資行動 13. 最適モデル：不確実性の下での企業行動 14. 最適モデル：インフレーションと期待 15. 総括授業：マクロ経済学を通した地域開発を展望する ■　教科書 0. J. ブランチャード， S. フィッシャー 著, 高田聖治 訳（1999），『マクロ経済学講義』 加賀	マクロ経済学の専門的知識の習得と，それを踏まえた実態経済の分析能力を身につけること。 ■　授業の概要 経済や産業の基本構造およびその開発・発展について，経済学の手法を用いて考察する。上級マクロ経済学の知識を身に着けるための講義である。毎回発表者が担当する章を輪読し，みんなで議論する。 ■　キーワード 上級マクロ経済学 ■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 最適成長理論を習得し，マクロ経済学に関連する英文ジャーナル論文を読めること。 ■　授業の計画 １．講義のガイダンス ２．消費と投資：Ramsey モデル ３．消費と投資：分権型経済 ４．消費と投資：政府の役割 ５．消費と投資：開放経済 ６．重複世代モデル：２期間生存モデル ７．重複世代モデル：資本蓄積 ８．重複世代モデル：連続時間モデル ９．重複世代モデル：財政政策 10. 重複世代モデル：総貯蓄と利子率 11. 最適モデル：不確実性の下での消費行動 12. 最適モデル：不確実性の下での投資行動 13. 最適モデル：不確実性の下での企業行動 14. 最適モデル：期待の役割 15. 最適モデル：インフレーションと期待 16. 総括授業 ■　教科書 0. J. ブランチャード， S. フィッシャー 著, 高田聖治 訳（1999），『マクロ経済学講義』 加賀

出版 ■　参考書 デビッド・ローマー 著,堀雅博, 岩成博夫, 南條隆 訳（1998），『上級マクロ経済学』 ■　教科書・参考書に関する補足情報 適宜プリントを配布し，関連図書を推薦する。 ■　成績評価方法・基準 発表と受講態度を総合的に判断して評価する。 ■　再試験の有無 原則として行われない ■　受講者へのメッセージ ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 趙　タン，総合科学部１号館３階中棟奥，Tel:088-656-7176 水曜１２：００～１３：００ ■　備考	出版 ■　参考書 デビッド・ローマー 著,堀雅博, 岩成博夫, 南條隆 訳（1998），『上級マクロ経済学』 ■　教科書・参考書に関する補足情報 適宜プリントを配布し，関連図書を推薦する。 ■　成績評価方法・基準 発表と受講態度を総合的に判断して評価する。 ■　再試験の有無 原則として行われない ■　受講者へのメッセージ ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 趙　タン，総合科学部１号館３階中棟奥，Tel:088-656-7176 水曜１２：００～１３：００ ■　備考

（新旧対照表）シラバス（57 ページ）

新	旧
（57 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 アート表現特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 河原崎　貴光（Takamitsu Kawarasaki） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年	（57 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 アート表現特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 河原崎　貴光（Takamitsu Kawarasaki） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年

地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 本講義は，メディアアートの視点に基づき，現代における表現の可能性について論じる。本講義を通じて，受講生は現代における表現の課題と手法に関する知識を獲得し，地域を含めた文化の活性化という観点から持続可能な社会の創成に貢献する能力を身につけることができる。 ■　授業の概要 芸術表現（絵画，メディアアート，写真，映像，漫画，ゲーム，等）の制作と発表に関する研究と制作をおこなう。作品制作における各自のテーマを明確にし，社会，メディア，テクノロジーへの俯瞰の視点を持ち具体的な表現へと結びつけるため，作品研究と学外（地域）に向けての作品発表を平行して行う。 ■　キーワード メディア，アート，美術，地域づくり ■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 ・現代における表現をめぐる課題について理解している。 ・現代における表現とその特色を，歴史・事例の文脈を踏まえて説明できる。 ・メディアアート表現の企画・制作を行い，地域に対して発信できる。 ■　授業の計画 １．メディアアートの歴史と現状 ２．メディアアートを活用した地域づくりの実例 ３．メディアアート表現のプランニング１　企画書の作成方法を解説 ４．メディアアート表現のプランニング２　コンセプトを考える	地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 本講義は，メディアアートの視点に基づき，現代における表現の可能性について論じる。本講義を通じて，受講生は現代における表現の課題と手法に関する知識を獲得し，地域を含めた文化の活性化という観点から持続可能な社会の創成に貢献する能力を身につけることができる。 ■　授業の概要 芸術表現（絵画，メディアアート，写真，映像，漫画，ゲーム，等）の制作と発表に関する研究と制作をおこなう。作品制作における各自のテーマを明確にし，社会，メディア，テクノロジーへの俯瞰の視点を持ち具体的な表現へと結びつけるため，作品研究と学外での作品発表を平行して行う。 ■　キーワード メディア，アート，美術 ■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 ・現代における表現をめぐる課題について理解している。 ・現代における表現とその特色を，歴史・事例の文脈を踏まえて説明できる。 ■　授業の計画 １．メディアアートの現状１　メディアアートの歴史 ２．メディアアートの現状２　メディアアートの現状解説 ３．メディアアート表現のプランニング１　企画書の作成方法を解説 ４．メディアアート表現のプランニング２　コンセプトを考える

５．メディアアート表現のプランニング３ 企画書の作成をする ６．メディアアート表現のプランニング４ 企画書のブラッシュアップ ７．プランのプレゼンテーション１ 考えた企画を地域に発信する ８．プランのプレゼンテーション２ 考えた企画を地域に発信する ９．作品制作１ 設計したプランに基づいた制作方法を検討する 10. 作品制作２ 作品制作手法の検証 11. 作品制作３ マケットの作成 12. 作品制作４ マケットを基に実作品を制作 13. 作品制作５ 作品の完成と展示 14. 完成作品のプレゼンテーション１ 完成した作品を地域に発信する 15. 完成作品のプレゼンテーション２ 完成した作品を地域に発信する ■ 教科書 教科書は使用しない。 ■ 参考書 無 ■ 教科書・参考書に関する補足情報 ■ 成績評価方法・基準 本授業の成績は，授業への取り組み状況と，成果作品の成績をあわせて総合的に評価する。成績評 価の割合の目安は，授業への取り組み状況（50%），成果作品の成績（50%）とする。 ■ 再試験の有無 無 ■ 受講者へのメッセージ ■ ＷＥＢページ ■ オフィスアワー 毎週火曜 14:30-16:00 ■ 備考 無	５．メディアアート表現のプランニング３ 企画書の作成をする ６．メディアアート表現のプランニング４ 企画書のブラッシュアップ ７．プランのプレゼンテーション１ 考えた企画を発表 ８．プランのプレゼンテーション２ 考えた企画を発表 ９．作品制作１ 設計したプランに基づいた制作方法を検討する 10. 作品制作２ 作品制作手法の検証 11. 作品制作３ マケットの作成 12. 作品制作４ マケットを基に実作品を制作 13. 作品制作５ 作品の完成と展示 14. 完成作品のプレゼンテーション１ 完成した作品をプレゼンテーションする 15. 完成作品のプレゼンテーション２ 完成した作品をプレゼンテーションする ■ 教科書 教科書は使用しない。 ■ 参考書 無 ■ 教科書・参考書に関する補足情報 ■ 成績評価方法・基準 本授業の成績は，授業への取り組み状況と，成果作品の成績をあわせて総合的に評価する。成績評 価の割合の目安は，授業への取り組み状況（50%），成果作品の成績（50%）とする。 ■ 再試験の有無 無 ■ 受講者へのメッセージ ■ ＷＥＢページ ■ オフィスアワー 毎週火曜 14:30-16:00 ■ 備考 無

（新旧対照表）シラバス（59 ページ）

新	旧
（59 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 映像デザイン特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 佐原　理（Osamu Sahara） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 映像の概論的内容を理解し，映像編集の基本的知識・技術を体得することをベースとして，映像を活用したデザインプロセスに親しみを持つこと，また，公共広告制作や特定の課題解決提案に向けた映像による分析やドキュメンタリーの制作など，映像を主軸として活用し，地域的・社会的課題の解決に寄与できる能力を身につけることが本授業の目的である。 ■　授業の概要 映像という現象の発見は紀元前に遡る。以来人類は映像を巧みに活用し特に 20　世紀は映像の世紀と云われるように多分野にわたり隆盛を極めた。近年では映像デザインというターミノロジーに表象されるように映像の／映像による・デザインによって汎用的に映像を応用する方法論が注目されている。そこで本授業では映	（59 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 映像デザイン特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 佐原　理（Osamu Sahara） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 映像の概論的内容を理解し，映像編集の基本的知識・技術を体得することをベースとして，映像を活用したデザインプロセスに親しみを持ち，映像による課題解決ができる能力を身につけることが本授業の目的である。 ■　授業の概要 映像という現象の発見は紀元前に遡る。以来人類は映像を巧みに活用し特に 20　世紀は映像の世紀と云われるように多分野にわたり隆盛を極めた。近年では映像デザインというターミノロジーに表象されるように映像の／映像による・デザインによって汎用的に映像を応用する方法論が注目されている。そこで本授業では映

像とプロセスを構築するという意味でのデザインが近接する中で，エスノグラフィーやナレッジマネージメント，クリエイティブシンキングに結びつけ創造的に課題発見や解決に結びつける方法論にも着目したい。授業では映像の歴史的概論に加え，記号によるコミュニケーションとしての映像デザインを基盤的知識として学び，映像によって，結ぶ，つなげる，みつめなおす，といったようなキーワードに基づき，公共広告制作など，映像を活用した実践的な地域課題解決プロジェクトを行い，地域デザインの方法論について見識を深める。 ■　キーワード 公共広告，映像，デザイン，地域課題解決 ■　先行科目 無 ■　関連科目 地域創成プロジェクト研究 ■　到達目標 ・映像に関わる諸般の概論的知識を理解する。 ・映像編集に積極的に参加しテクノロジーに関する基本的な知識・技術を理解し獲得する。 ・映像を活用し，視覚的に意図の伝達ができるようになる。 ・プロジェクトの課題に対し映像によって思考を整理し，地域や社会にとって意味ある成果を表現できる。 ■　授業の計画 1．イントロダクション　地域課題解決のための映像とデザイン 2．デザイン思考のためのワークショップ 3．映像の歴史的変遷とメディアとしての変遷 4．地域における映像の役割　パブリックメディアとパーソナルメディア 5．映像と身体 6．地域課題を発見する 7．撮影方法と編集 8．客観的視点と主観的視点の整理	像とプロセスを構築するという意味でのデザインが近接する中で，エスノグラフィーやナレッジマネージメント，クリエイティブシンキングに結びつけ創造的に課題発見や解決に結びつける方法論にも着目したい。授業では映像の歴史的概論に加え，記号によるコミュニケーションとしての映像デザインを基盤的知識として学び，映像によって，結ぶ，つなげる，みつめなおす，といったようなキーワードに基づき実践的に映像を活用したプロジェクトを行い，地域デザインの方法論について見識を深める。 ■　キーワード 映像，デザイン ■　先行科目 無 ■　関連科目 地域創成プロジェクト研究 ■　到達目標 ・映像に関わる諸般の概論的知識を理解する。 ・映像編集に積極的に参加しテクノロジーに関する基本的な知識・技術を理解し獲得する。 ・映像を活用し，視覚的に意図の伝達ができるようになる。 ・プロジェクトの課題に対し映像によって思考を整理し意味ある成果を表現できる。 ■　授業の計画 映像の発見から通時的に技術的発展を基軸にコミュニケーション方法の変容について講義を行う。さらには，マスメディアを主眼点とし映像の現在性，記録性の側面から情報環境のあり方について理解を深める。その上で，映像撮影・編集の技術について学びテーマにそって映像によって思考をまとめる方法論を体得する。最終段階では，映像によって，結ぶ，つなげる，みつめなおす，といったようなキーワードに基づき映像によって身の回りや地域の課題について新た

9．映像思考による論理的展開 10．地域課題解決のための映像制作プロジェクト１ 11．地域課題解決のための映像制作プロジェクト２ 12．地域課題解決のための映像制作プロジェクト３ 13．批評会１ 14．批評会２ 15．まとめ－映像によるデザイン，地域デザインの方法論として ■　教科書 教科書は使用しない。 ■　参考書 ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 授業への取り組み状況（30%），授業中の報告の成績等をレポート(30%)とプレゼンテーション(40%)のパフォーマンスによって総合的に評価する。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 映像撮影・編集には専用の機材使用も可能である。一方で個人のスマートフォンなどの活用も見込まれる。受講者は適宜そうした技術にある程度理解があることが望ましい。 ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 佐原：水曜日 12:00-12:50 ■　備考	な価値を提示するプロジェクトに取り組み，作品発表を行う。 ■　教科書 教科書は使用しない。 ■　参考書 ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 授業への取り組み状況（30%），授業中の報告の成績等をレポート(30%)とプレゼンテーション(40%)のパフォーマンスによって総合的に評価する。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 映像撮影・編集には専用の機材使用も可能である。一方で個人のスマートフォンなどの活用も見込まれる。受講者は適宜そうした技術にある程度理解があることが望ましい。 ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 佐原：水曜日 12:00-12:50 ■　備考

（新旧対照表）シラバス（55 ページ）

新	旧
（55 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 日本歴史文化特論	（55 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 日本歴史文化特論

■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 衣川　仁(Satoshi Kinugawa)・中村　豊(Yutaka Nakamura) ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 地域の歴史は，ともすれば総説的な日本史像のなかに埋没しがちである。しかし，地域づくりの文脈において，地方の人々が独自に受け継いできた歴史を再発見し活用しようという動きも活性化しつつある。本講義は，日本史・考古学の視点に基づき，日本古代・中世史に関する文献史料と，先史時代を中心とする考古資料から日本史（先史・古代・中世）研究上の課題を明らかにしつつ，比較地域史的な視点から，地域文化史を再発見し，徳島県の事例も踏まえつつ，歴史文化資源を生かした「地域創成」の可能性を探る。 ■　授業の概要 日本列島とそれをとりまく地域の特徴をとらえる視角の一つに「歴史」がある。「歴史」的考察には，発掘調査によってえられた資料から考察する考古学と，文献資料に書かれた内容から考察する文献史学（狭義の歴史学）という，二つの手法が存在する。この授業では，考古学・文献史学という異なる手法によるオムニバス形式を採用する。日本列島とそれをとりまく地域の歴史・文化について，時には東アジア世界というグ	■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 衣川　仁(Satoshi Kinugawa)・中村　豊(Yutaka Nakamura) ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 地域の歴史は，ともすれば総説的な日本史像のなかに埋没しがちである。しかし，地域づくりの文脈において，地方の人々が独自に受け継いできた歴史を再発見し活用しようという動きも活性化しつつある。本講義は，日本史・考古学の視点に基づき，日本古代・中世史に関する文献史料と，先史時代を中心とする考古資料から日本史（先史・古代・中世）研究上の課題を明らかにしつつ，比較地域史的な視点から，地域文化史を再発見し，可能な範囲で「地域創成」の可能性を探る。 ■　授業の概要 日本列島とそれをとりまく地域の特徴をとらえる視角の一つに「歴史」がある。「歴史」的考察には，発掘調査によってえられた資料から考察する考古学と，文献資料に書かれた内容から考察する文献史学（狭義の歴史学）という，二つの手法が存在する。この授業では，考古学・文献史学という異なる手法によるオムニバス形式を採用する。日本列島とそれをとりまく地域の歴史・文化について，時には東アジア世界というグ

ローバルな視点も踏まえながら，比較地域史的視点から地域独自の歴史を相対化し，その理解を深めることを目的とする。 　先史から古代・中世という歴史的環境における研究課題と，比較地域史的視点を通して，地域文化の再発見をめざし，そこから「歴史文化資源を活用した地域づくり」に資する人材育成の一助となるような歴史的視点を見出すことを目的とする。 ■　キーワード 日本古代史，日本中世史，日本考古学，比較地域史 ■　先行科目 無 ■　関連科目 ■　到達目標 ・日本古代中世史，日本考古学上の最新の研究成果をふまえ，課題と問題点について理解している。 ■　シラバス（授業計画） ・上を踏まえつつ，比較地域史的視点から，地域独自の歴史像を再発見する。 ■　授業の計画 １．総論 日本考古学，日本古代・中世史の現状と課題 ２．縄文時代の日本列島と地域色 ３．徳島の縄文時代 ４．弥生時代の稲作と畠作 ５．石棒と銅鐸 ６．徳島県の石，青色片岩で作られた磨製石斧 ７．徳島の古墳時代と水銀朱の利用 ８．古代国家と地域社会 ９．宗教と地域社会－古代から中世へ－ 10．都鄙間の交通と地域社会 11．武門の台頭－地域を守る武士，天皇を守る武士－ 12．東アジア世界と日本 13．中世社会の展開	ローバルな視点も踏まえながら，比較地域史的視点から地域独自の歴史を相対化し，その理解を深めることを目的とする。 　先史から古代・中世という歴史的環境における研究課題と，比較地域史的視点を通して，地域文化の再発見をめざし，そこから「歴史文化資源を活用した地域づくり」に資する人材育成の一助となるような歴史的視点を見出すことを目的とする。 ■　キーワード 日本古代史，日本中世史，日本考古学，比較地域史 ■　先行科目 無 ■　関連科目 ■　到達目標 ・日本古代中世史，日本考古学上の最新の研究成果をふまえ，課題と問題点について理解している。 ■　シラバス（授業計画） ・上を踏まえつつ，比較地域史的視点から，地域独自の歴史像を再発見する。 ■　授業の計画 １．総論 日本考古学，日本古代・中世史の現状と課題 ２．縄文時代の日本列島と地域色 ３．徳島の縄文時代 ４．弥生時代の稲作と畠作 ５．石棒と銅鐸 ６．徳島県の石，青色片岩で作られた磨製石斧 ７．徳島の古墳時代と水銀朱の利用 ８．古代国家と地域社会 ９．宗教と地域社会－古代から中世へ－ 10．都鄙間の交通と地域社会 11．武門の台頭－地域を守る武士，天皇を守る武士－ 12．東アジア世界と日本 13．中世社会の展開

14. 探訪徳島市国府地域。フィールドからみた地域の歴史文化資源の保存・活用の実態。 15. 総括 日本考古学，日本古代・中世史からみた地域史ー地域史の再認識と地域創成の可能性 ■　教科書 教科書は使用しない。毎回，授業中にプリントを配布する。 ■　参考書 授業中に随時紹介する。 ■　教科書・参考書に関する補足情報 個別のトピックに関する参考書は，授業中に適宜紹介する。 ■　成績評価方法・基準 本授業の成績は，授業への取り組み状況と，期末レポートの成績をあわせて総合的に評価する。成績評価の割合の目安は，授業への取り組み状況（70%），期末レポートの成績（30%）とする。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 文献史料と考古資料，異なる視点から歴史を学びます。 ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 毎週水曜 12:00-12:50（中村） 毎週月曜 10:30-12:00（衣川） ■　備考	14. 探訪徳島市国府地域。フィールドからみた地域の先史・古代。 15. 総括 日本考古学，日本古代・中世史からみた地域史 ■　教科書 教科書は使用しない。毎回，授業中にプリントを配布する。 ■　参考書 授業中に随時紹介する。 ■　教科書・参考書に関する補足情報 個別のトピックに関する参考書は，授業中に適宜紹介する。 ■　成績評価方法・基準 本授業の成績は，授業への取り組み状況と，期末レポートの成績をあわせて総合的に評価する。成績評価の割合の目安は，授業への取り組み状況（70%），期末レポートの成績（30%）とする。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 文献史料と考古資料，異なる視点から歴史を学びます。 ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 毎週水曜 12:00-12:50（中村） 毎週月曜 10:30-12:00（衣川） ■　備考

（新旧対照表）授業科目の概要（13 ページ）

新	旧
（13 ページ） 授業科目名　健康科学特論 　人間の身体の構造と機能を細胞レベルから学び，運動のメリットについて総合的に理解する。アクティブ・ラーニングを導入しており，通常の講義と実習に加えて，学生は与えられたテーマについて定期的に発表を行う。人間の身体の構造と機能を細胞レベルから学ぶ。具体的には，骨	（13 ページ） 授業科目名　健康科学特論 　人間の身体の構造と機能を細胞レベルから学び，運動のメリットについて総合的に理解する。アクティブ・ラーニングを導入しており，通常の講義と実習に加えて，学生は与えられたテーマについて定期的に発表を行う。人間の身体の構造と機能を細胞レベルから学ぶ。具体的には，骨

格筋，関節，骨，軟骨，神経，靭帯について分子から組織レベルまでを包括的に学ぶ。これにより運動のメリットとデメリットについて総合的に理解し，ひいては，若年から高齢者に至る地域住民のQuality of Lifeに関わる健康課題を確認し，解決への取り組み方を検討する。	格筋，骨，軟骨，神経，靭帯について分子から組織レベルまでを包括的に学ぶ。これにより運動のメリットとデメリットについて総合的に理解する。

（新旧対照表）シラバス（71ページ）

新	旧
（71ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 健康科学特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 山口鉄生（Tetsuo Yamaguchi） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 高齢社会に伴い身体活動の低下を伴う人々が増加している。地域住民のQuality of Lifeをより充実したものにするためには，住民の運動器の特性を把握する必要がある。一方，若年者に目を向けると過度なスポーツ活動で関節や靭帯などを損傷するケースが多い。超音波診断装置は，若年から高齢者に至るまで手軽に骨格筋や関節の形態変化について解析することができる。本講義では，この解析手法を中心として，ス	（71ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 健康科学特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（地域系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 山口鉄生（Tetsuo Yamaguchi） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 骨格筋と腱の形態変化について解析することで，地域課題の解決に資する能力の養成を目指している。

ポーツ医学の理論・技法を地域住民の健康課題の解決に活用する能力の養成を目指す。	
■　授業の概要 　超音波装置を用いた研究手法について基礎知識を身につける。さらに骨格筋と関節に関する研究内容を発表・論議することで超音波装置による解析法や各自の研究についての理解を深めるとともに，若年から高齢者に至る地域住民の Quality of Life に関わる健康課題を確認し，解決への取り組み方を検討する。	■　授業の概要 超音波装置を用いた研究手法について基礎知識を身につける。さらに骨格筋と腱に関する研究内容を発表・論議することで超音波装置による解析法や各自の研究についての理解を深める。
■　キーワード 超音波装置，骨格筋，関節，健康維持，疾患予防	■　キーワード 超音波装置，骨格筋，腱，形態
■　先行科目 無	■　先行科目 無
■　関連科目 無	■　関連科目 無
■　到達目標 ・骨格筋と関節の形態変化について理解する。 ・超音波装置を用いた研究手法の基礎を理解する。 ・地域における健康課題への取り組み方とその具体例について学ぶ。	■　到達目標 ・骨格筋と腱の形態変化について理解する。 ・超音波装置を用いた研究手法の基礎を理解する。
■　授業の計画 １．ガイダンス（地域における健康課題） ２．骨格筋と関節について ３．骨格筋と関節の形態 ４．骨格筋と関節の分子的変化 ５．超音波装置の使い方 ６．骨格筋と関節の計測１ ７．骨格筋と関節の計測２ ８．中間まとめ（健康課題と QOL） ９．論文発表（輪番制），討論（筋萎縮） 10．論文発表（輪番制），討論（筋肥大） 11．論文発表（輪番制），討論（筋疾患と QOL） 12．論文発表（輪番制），討論（関節） 13．論文発表（輪番制），討論（関節疾患と QOL） 14．討論（スポーツ医学の知見を活用した地域健康課題解決への取り組み方）	■　授業の計画 １．ガイダンス ２．骨格筋と腱について ３．骨格筋と腱の形態 ４．骨格筋と腱の分子的変化 ５．超音波装置の使い方 ６．骨格筋と腱の計測１ ７．骨格筋と腱の計測２ ８．中間まとめ ９．論文発表（輪番制），討論（筋萎縮） 10．論文発表（輪番制），討論（筋肥大） 11．論文発表（輪番制），討論（筋疾患） 12．論文発表（輪番制），討論（筋と腱の外傷） 13．論文発表（輪番制），討論（筋に対する各種ストレス）

15. 授業全体に対する口頭試問 ■　教科書 無 ■　参考書 無 ■　教科書・参考書に関する補足情報 授業中に随時指示する。 ■　成績評価方法・基準 発表，授業態度，提出物など，総合的に判断する。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 積極的に質問してください。 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー 講義終了後 ■　備考 無	14. 論文発表（輪番制），討論（エコーによる筋と腱の形態計測） 15. 授業全体に対する口頭試問 ■　教科書 無 ■　参考書 無 ■　教科書・参考書に関する補足情報 授業中に随時指示する。 ■　成績評価方法・基準 発表，授業態度，提出物など，総合的に判断する。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 積極的に質問してください。 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー 講義終了後 ■　備考 無

（新旧対照表）シラバス（77 ページ）

新	旧
（77 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 グローバル文化特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（グローバル系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 内藤　直樹（Naoki Naito） ■　授業形態 講義	（77 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 グローバル文化特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（グローバル系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 内藤　直樹（Naoki Naito） ■　授業形態 講義

■　単位数

２単位

■　授業開講学期

後期

■　対象学生・学年

地域創成専攻　１・２年生

■　授業の目的

本講義の目的は，グローバル化が進む現代社会における国内外の文化・社会現象の動態を理解するとともに，そうした現象に介入する方法を身につけることにある。それを通じてグローバルな状況における様々な社会問題の解決に必要な視点と方法論を学ぶ。具体的には日本を含むアジア・アフリカ地域における貧困問題，環境問題，紛争・難民問題に関わる１）ステークホルダー・コミュニティの文化・社会変容事例を比較検討するとともに，２）関連する開発援助や人道支援プロジェクトの妥当性について議論する。さらに３）日本国内における国連各機関による世界遺産制度等のうごきが地域の文化や社会に与える影についても検討する。こうした検討を通じてグローバルな文化とローカルな文化の接合に関わる現場で必要とされる知見とスキルを涵養する。

■　授業の概要

グローバル化と呼ばれる現象の動態を理解するための視点や方法論を教授する。具体的には，世界各地にて生起している様々な「社会問題」の文化・社会的背景について詳述する。そのひとつとして，日本では世界遺産観光現象もとりあげる。また，こうした社会問題の解決に関わっている実際のアクターのニーズに応えうるアカデミックな知見はいかなるものなのかについて考えていく。

■　キーワード

文化人類学，地域研究，フィールドワーク，開発援助，人道支援

■　先行科目

■　単位数

２単位

■　授業開講学期

後期

■　対象学生・学年

地域創成専攻　１・２年生

■　授業の目的

本講義の目的は，グローバル化が進む現代社会における国内外の文化・社会現象の動態を理解するとともに，そうした現象に介入する方法を身につけることにある。それを通じてグローバルな状況における様々な社会問題の解決に必要な視点と方法論を学ぶ。具体的には日本を含むアジア・アフリカ地域における貧困問題，環境問題，紛争・難民問題に関わる１）ステークホルダー・コミュニティの文化・社会変容事例を比較検討するとともに，２）関連する開発援助や人道支援プロジェクトの妥当性について議論する。さらに３）日本国内における国連各機関による世界遺産制度等のうごきが地域の文化や社会に与える影についても検討する。こうした検討を通じてグローバルな文化とローカルな文化の接合に関わる現場で必要とされる知見とスキルを涵養する。

■　授業の概要

グローバル化と呼ばれる現象の動態を理解するための視点や方法論を教授する。具体的には，世界各地にて生起している様々な「社会問題」の文化・社会的背景について詳述する。そのひとつとして，日本では世界遺産観光現象もとりあげる。また，こうした社会問題の解決に関わっている実際のアクターのニーズに応えうるアカデミックな知見はいかなるものなのかについて考えていく。

■　キーワード

文化人類学，地域研究，フィールドワーク，開発援助，人道支援

■　先行科目

無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 グローバルな状況のなかで課題を発見し問題解決をおこなうために際に必要な社会科学的知識やスキルを身につける。 ■　授業の計画 １．イントロダクション ２．グローバリゼーションとはなにか１ ３．グローバリゼーションとはなにか２ ４．グローバリゼーションとロカリティ ５．開発援助と文化１ ６．開発援助と文化２ ７．人道支援と文化１ ８．人道支援と文化２ ９．先住民運動と文化１ 10．先住民運動と文化２ 11．観光と文化１ 12．観光と文化２ 13．世界遺産と文化１ 14．世界遺産と文化２ 15．総括授業：草の根のグローバリゼーション ■　教科書 教科書は使用しない。 ■　参考書 内藤直樹・山北輝宏 2014『社会的包摂／排除の人類学：難民・開発・福祉』昭和堂 ■　教科書・参考書に関する補足情報 無 ■　成績評価方法・基準	無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 グローバルな状況のなかで課題を発見し問題解決をおこなうために際に必要な社会科学的知識やスキルを身につける。 ■　授業の計画 １．イントロダクション ２．文化人類学への招待 ３．人類学的フィールドワークの特徴 ４．参与観察の誕生 ５．民族誌的事実とは何か ６．文化相対主義とは何か ７．家族と親族：親と子は血がつながっているものか？ ８．セクシュアリティとジェンダー：「性」の多義性とは？ ９．交換と経済：他者とは何か？ 10．儀礼と分類：人はどのように人生を区切るのか？ 11．宗教と呪術：世界は脱魔術化されるのか？ 12．死と葬儀：死者はどのように扱われるのか？ 13．民族と国家：集団意識はどのように生まれるのか？ 14．文化とアイデンティティ：先住民族は消滅するのか？ 15．いま「民族誌」を書くこと 16．期末試験 ■　教科書 教科書は使用しない。 ■　参考書 内藤直樹・山北輝宏 2014『社会的包摂／排除の人類学：難民・開発・福祉』昭和堂 ■　教科書・参考書に関する補足情報 無 ■　成績評価方法・基準

本授業の成績は，授業への取り組み状況と，期末レポートの成績をあわせて総合的に評価する。 成績評価の割合の目安は，授業への取り組み状況（70%），期末レポートの成績（30%）とする。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 無 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー 月曜 12:00-12:50 ■　備考 無	本授業の成績は，授業への取り組み状況と，期末レポートの成績をあわせて総合的に評価する。 成績評価の割合の目安は，授業への取り組み状況（70%），期末レポートの成績（30%）とする。 ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 無 ■　ＷＥＢページ 無 ■　オフィスアワー 月曜 12:00-12:50 ■　備考 無

（新旧対照表）シラバス（83 ページ）

新	旧
（83 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 応用倫理学特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（グローバル系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 山口　裕之（Hiroyuki Yamaguchi） 熊坂　元大（Motohiro Kumasaka） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的	（83 ページ） シラバス（授業計画） ■　授業科目名 応用倫理学特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目（グローバル系科目） ■　選必区分 選択 ■　担当教員名（漢字及びローマ字表記） 山口　裕之（Hiroyuki Yamaguchi） 熊坂　元大（Motohiro Kumasaka） ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 後期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的

環境倫理学の基本的な知識を身につける。 環境倫理学的な問題について討議する。 ■　授業の概要 持続可能な開発目標（SDGs）への取り組みが国際的に求められている中，環境倫理学を中心とする応用倫理学の知識に裏打ちされた思考力は，グローバル化社会の中で必須である。 本講義では，10 頁前後の英語論文 46 編で構成されている Oxford Handbook of Environmental Ethics の講読を行う。初回の授業時に担当箇所と担当順序を決め，毎回，論文１編を取りあげて，哲学・倫理学の視点から環境問題および関連する社会問題について議論する。 応用倫理学の基礎知識を修得すること，修得した知識を用いて議論を組み立てる能力を涵養することが本講義の目標である。こうした知識と能力は地域や地球の環境に対する自身の考え方や関わり方を，異なる文化的・社会的視点を持つ人びとに発信し，またそうした人々の思想や価値観を理解するために必要なものである。 受講者は毎回必ず事前に当該論文を読んでから参加すること。一学期間で最低一回は報告者の役割を果たすこと。 ■　キーワード 環境倫理学 ■　先行科目 なし ■　関連科目 なし ■　到達目標 環境倫理学的な問題について，学問的知見から評価・判断することができる。 ■　授業の計画 1．ガイダンス：授業方針，教科書についての説明。および環境思想史と問題と哲学・倫理学の関係についての入門講義	環境倫理学の基本的な知識を身につける。 環境倫理学的な問題について討議する。 ■　授業の概要 10 頁前後の英語論文 46 編で構成されている Oxford Handbook of Environmental Ethics の講読を行う。初回の授業時に担当箇所と担当順序を決め，毎回，論文１編を取りあげて，哲学・倫理学の視点から環境問題および関連する社会問題について議論する。 応用倫理学の基礎知識を修得すること，修得した知識を用いて議論を組み立てる能力を涵養することが本講義の目標である。こうした知識と能力は地域や地球の環境に対する自身の考え方や関わり方を，異なる文化的・社会的視点を持つ人びとに発信し，またそうした人々の思想や価値観を理解するために必要なものである。 受講者は毎回必ず事前に当該論文を読んでから参加すること。一学期間で最低一回は報告者の役割を果たすこと。 ■　キーワード 環境倫理学 ■　先行科目 なし ■　関連科目 なし ■　到達目標 環境倫理学的な問題について，学問的知見から評価・判断することができる。 ■　授業の計画 ①イントロダクション：教科書についての説明。環境倫理学についての基礎的な概説。２回目以降の担当者を決める。

2. 教科書7章「人間中心主義：災厄ならびに希望としての人間性」についての担当者による発表と討論 3. 同11章「原生自然を評価する」についての担当者による発表と討論 4. 同16章「美的価値，自然，環境」についての担当者による発表と討論 5. 同4章「市場，倫理，環境」についての担当者による発表と討論 6. 同 38 章「エコシステムマネージメントの倫理」についての担当者による発表と討論 7. 同43章「環境コンフリクト」についての担当者による発表と討論 8. 同33章「倫理的なエネルギーの選択」についての担当者による発表と討論 9. 同41章「気候外交」についての担当者による発表と討論 10. 同29章「環境倫理における未来世代」についての担当者による発表と討論 11. 同30章「多世代にわたる公益としての持続可能性」についての担当者による発表と討論 12. 同34章「食料，農業，環境のナラティヴ」についての担当者による発表と討論 13. 同37章「技術哲学と環境」についての担当者による発表と討論 14. 同42章「ジオエンジニアリング：意図的な気候操作者に対する倫理的疑問」についての担当者による発表と討論 15. 授業のまとめと振り返り ■　教科書 Allen Thompson & Stephen M. Gardiner ed. The Oxford Handbook of Environmental Ethics, Oxford University Press, 2016. ■　参考書 適宜授業中に紹介する。 ■　教科書・参考書に関する補足情報	②～⑭ Oxford Handbook of Environmental Ethics より毎週１論文について発表・討議する。 ⑮まとめ ■　教科書 Allen Thompson & Stephen M. Gardiner ed. The Oxford Handbook of Environmental Ethics, Oxford University Press, 2016. ■　参考書 適宜授業中に紹介する。 ■　教科書・参考書に関する補足情報

■　成績評価方法・基準 発表を担当することが単位取得のための必要条件。 概要報告の妥当性，質疑応答への積極的な参加，議論を組み立てる力を総合的に評価する。 ■　再試験の有無 なし ■　受講者へのメッセージ ■　ＷＥＢページ なし ■　オフィスアワー 山口：火曜 10：30-11：30 熊坂：メールで問い合わせること ■　備考	■　成績評価方法・基準 発表を担当することが単位取得のための必要条件。 概要報告の妥当性，質疑応答への積極的な参加，議論を組み立てる力を総合的に評価する。 ■　再試験の有無 なし ■　受講者へのメッセージ ■　ＷＥＢページ なし ■　オフィスアワー 山口：火曜 10：30-11：30 熊坂：メールで問い合わせること ■　備考

（新旧対照表）授業科目の概要（17 ページ）

新	旧
（17 ページ） （概要） 人・言語・文化の交流に留意しつつ，日本古典文学，日本近現代文学の各領域について総合的に講じる。実地調査・文献調査の方法，また，言語分析・作品分析の方法等の中から重要な部分を講義および演習を通して教授する。ひいては，多文化共生社会における文化の相互理解や国際交流の基盤となる自文化理解（あるいは，日本文化理解）を目指す。 （オムニバス方式/全 15 回） （③　堤和博・⑪　富塚昌輝/1 回）（共同 ガイダンス　グローバル時代における日本文学研究の意義と方法という観点を踏まえた本講義の全体的な目的等の提示 （③　堤和博/7 回） 日本古典文学・文化を研究するために必要な専門的知識・方法について講義・演習を行う。 （⑪　富塚昌輝/7 回）	（17 ページ） （概要） 日本古典文学，日本近現代文学の各領域について総合的に講じる。実地調査・文献調査の方法，また，言語分析・作品分析の方法等の中から重要な部分を講義および演習を通して教授する。ひいては，多文化共生社会における文化の相互理解や国際交流の基盤となる自文化理解（あるいは，日本文化理解）を目指す 。 （オムニバス方式/全 15 回） （9　堤和博・31　富塚昌輝/1 回）（共同） ガイダンス　本講義の全体的な目的等の提示 （9　堤和博/7 回） 日本古典文学・文化を研究するために必要な専門的知識・方法について講義・演習を行う。 （31　富塚昌輝/7 回）

日本近現代文学・文化を研究するために必要な専門的知識・方法について講義・演習を行う。	日本近現代文学・文化を研究するために必要な専門的知識・方法について講義・演習を行う。

(新旧対照表) シラバス (95 ページ)

(95 ページ) シラバス (授業計画) ■　授業科目名 日本言語文化特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目 (グローバル系科目) ■　選必区分 選択 ■　担当教員名 (漢字及びローマ字表記) 堤　和博 (Kazuhiro Ttsutsumi) 富塚　昌輝 (Masaki Tomitsuka) ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年 ■　授業の目的 日本古典文学及び日本近現代文学の各領域について学修し，多文化共生社会における文化の相互理解や国際交流の基盤となる自文化理解（あるいは，日本文化理解）を目指す。 ■　授業の概要 人・言語・文化の交流に留意しつつ，日本古典文学及び日本近現代文学の各領域について総合的に講じる。実地調査・文献調査の方法，また，言語分析・作品分析の方法等の中から重要な部分を講義および演習を通して会得する。 ■　キーワード 言語文化，日本文学，自文化理解，日本文化理解	(95 ページ) シラバス (授業計画) ■　授業科目名 日本言語文化特論 ■　科目分野 専攻専門科目・教育クラスター科目 (グローバル系科目) ■　選必区分 選択 ■　担当教員名 (漢字及びローマ字表記) 堤　和博 (Kazuhiro Ttsutsumi) 富塚　昌輝 (Masaki Tomitsuka) ■　授業形態 講義 ■　単位数 ２単位 ■　授業開講学期 前期 ■　対象学生・学年 地域創成専攻　１・２年次 ■　授業の目的 日本古典文学及び日本近現代文学の各領域について学修し，多文化共生社会における文化の相互理解や国際交流の基盤となる自文化理解（あるいは，日本文化理解）を目指す。 ■　授業の概要 日本古典文学及び日本近現代文学の各領域について総合的に講じる。実地調査・文献調査の方法，また，言語分析・作品分析の方法等の中から重要な部分を講義および演習を通して会得する。 ■　キーワード 言語文化，日本文学，自文化理解，日本文化理解

■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 ・日本の古典・近現代文学全般に亘る理解力，洞察力を獲得する。 ・上記の目標達成と同時に，日本文化としての日本文学の特質に関する理解ができるようになる。 ■　授業の計画 １．全体のガイダンス－グローバル時代の日本文学研究の意義と方法 （２～８　堤担当　日本古典文学） ２．日本古典文学史上の問題（１）　貴族文化の古代 ３．日本古典文学史上の問題（２）　武家政権の中世 ４．日本古典文学史上の問題（３）　徳川政権の近世 ５．上記（１）～（３）に関する資料的調査の方法 ６．日本古典文学研究のための日本語史 ７．研究対象とする作家・作品・分野などの選定方法－グローバル時代における日本古典文学研究の意義と方法の確認を兼ねて ８．受講者各自による研究対象の発表（演習形式） （９～15　富塚担当　日本近現代文学） ９．日本近現代文学史再考（１）　近代国家の成立と言語・文化の問題－近現代における日本文化理解の要諦 10．日本近現代文学史再考（２）　漢詩文の近代－日本近代文学の複数言語・複数文化性 11．日本近現代文学史再考（３）　翻訳小説と政治小説－文化の交流と文学の刷新 12．日本近現代文学史再考（４）　新聞と文学	■　先行科目 無 ■　関連科目 無 ■　到達目標 ・日本の古典・近現代文学全般に亘る理解力，洞察力を獲得する。 ・上記の目標達成と同時に他文化比較などができるようになる。 ■　授業の計画 １．全体のガイダンス （２～８　堤担当　日本古典文学） ２．日本古典文学史上の問題（１）　奈良時代から平安時代 ３．日本古典文学史上の問題（２）　武家政権の中世 ４．日本古典文学史上の問題（３）　徳川政権の近世 ５．上記（１）～（３）に関する資料的調査の方法 ６．日本古典文学研究のための日本語史 ７．研究対象とする作家・作品・分野などの選定方法－研究史の掌握とともに ８．受講者各自による研究対象の発表（演習形式） （９～15　富塚担当　日本近現代文学） ９．日本近現代文学史再考（１）　近代国家の成立と言語・文化の問題 10．日本近現代文学史再考（２）　漢詩文の近代 11．日本近現代文学史再考（３）　翻訳小説と政治小説 12．日本近現代文学史再考（４）　新聞と文学

13. 日本近現代文学史再考（５）　近代女性文学の興隆 14. 日本近現代文学史再考（６）　家庭小説 15. 日本近現代文学史再考（７）　西洋文化と伝統文化との相克，まとめ－グローバル時代における日本近現代文学の意義と方法 ■　教科書 堤担当分　無 富塚担当分　無 ■　参考書 堤担当分　適宜指示する。 富塚担当分　Shirane, H. et al. ed. *The Cambridge History of Japanese Literature*, Cambridge University Press, 2016. ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 堤 50 点と富塚 50 点を合算して 100 点満点とする。ただし，各につき 30 点以上獲得していることを合格の条件とする。 堤分の内訳　　授業への取り組み 30%と期末のレポート 70% 富塚分の内訳　　授業への取り組み 30%と授業時に課す課題 70% ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 堤担当分の授業では，古文・漢文で書かれている作品を対象とし，古文・漢文，さらには変体漢文で書かれている史料等を多数取り上げる。くずし字・古文書を読む場合もある。 富塚担当分の授業では，明治時代以降の様々な文学作品を取り上げ，ジャンル区分や文学史的な配置のあり方を検討する。英語文献を読む場合もある。 ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 堤：随時	13. 日本近現代文学史再考（５）　近代女性文学の興隆 14. 日本近現代文学史再考（６）　家庭小説 15. 日本近現代文学史再考（７）　西洋文化と伝統文化との相克 ■　教科書 無 ■　参考書 堤担当分　津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（一）～（八）岩波文庫 富塚担当分　Shirane, H. et al. ed. The Cambridge History of Japanese Literature, Cambridge University Press, 2016. ■　教科書・参考書に関する補足情報 ■　成績評価方法・基準 堤 50 点と富塚 50 点を合算して 100 点満点とする。ただし，各につき 30 点以上獲得していることを合格の条件とする。 堤分の内訳　　授業への取り組み 30%と期末のレポート 70% 富塚分の内訳　　授業への取り組み 30%と授業時に課す課題 70% ■　再試験の有無 無 ■　受講者へのメッセージ 堤担当分の授業では，古文・漢文で書かれている作品を対象とし，古文・漢文，さらには変体漢文で書かれている史料等を多数取り上げる。くずし字・古文書を読む場合もある。 富塚担当分の授業では，明治時代以降の様々な文学作品を取り上げ，ジャンル区分や文学史的な配置のあり方を検討する。英語文献を読む場合もある。 ■　ＷＥＢページ ■　オフィスアワー 堤：随時

富塚：随時 ■　備考	富塚：随時 ■　備考

（改善事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M），臨床心理学専攻（M），理工学専攻（M），生物資源学専攻（M）

１０．＜教育方法の説明が不十分＞ 「データサイエンス」については，研究科の全学生が受講する科目であるが，具体的な授業方法，例えば，どの様にグループ分けを行うのか等の説明が十分ではないため説明を充実させること。【４専攻共通】

（対応）

以下の内容により「設置の趣旨等を記載した書類」を修正する。

研究科全学生を対象とした基盤教育科目として，「データサイエンス」（必修２単位）を開設し，授業の前半（９回）ではデータサイエンスに関わる専門用語，考え方及び主な手法等理論と技術の解説を行い，後半（６回）では，文系・理系の学生が混在したグループ学習の形で，データ分析のプロセスを演習形式で学ばせる。

前半の授業は受講生全体をほぼ同じ人数となるように各クラス 110 名～140 名程度の３クラスに分け，技術用語，考え方及び主な手法等について同じ内容を学ぶ。これによって最低限の知識を共有した上で後半の演習に臨む。ただし，学部時代に数学を学んだ学生にとっては，それらの内容は数式を用いて説明した方が習得しやすい。その一方で，学部時代に数学を学んでいない学生にとっては，数式を用いて説明されると習得は難しい。そこで，３クラスの中で１クラスは学部時代に数学を学んでいない学生で編成し，数式をできる限り使わずに講述する。残りの２クラスは理工学部学生を中心に編成し，数式を使って講述する。

後半の演習は全学生をランダムに１クラス 40 名程度の９クラスに分けた後，それぞれ専攻やコースが異なる５～６人程度のグループに分けて演習形式で行う。この演習ではデータ探索の重要性，可視化の効果，分析ツールの選択と利用方法について説明した上で，グループごとに現実のデータ分析に取り組み，ディスカッションを通じてデータから新たな知見を導出するプロセスを体験する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類（64 ページ）

新	旧
（64 ページ） ②　研究科共通科目 （中略） ア．研究科基盤教育科目 研究科全学生を対象とした基盤教育科目として，「データサイエンス」（２単位必修）を開設する。データ処理に関する基礎知識・技能，とりわけ統計処理に関する素養は，文系・理系を問わず，全ての研究分野，また実社会において必要性が増している。授業の前半（９回）ではデータサイエンスに関わる理論と技術の解説を行い，後	（53 ページ） ②　研究科共通科目 （中略） ア．研究科基盤教育科目 研究科全学生を対象とした基盤教育科目として，「データサイエンス」（２単位必修）を開設する。データ処理に関する基礎知識・技能，とりわけ統計処理に関する素養は，文系・理系を問わず，全ての研究分野，また実社会において必要性が増している。授業の前半（９回）ではデータサイエンスに関わる理論と技術の解説を行い，後

半（６回）では，文系・理系の学生が混在したグループ学習の形で，データ分析のプロセスを演習形式で学ばせる。 前半の授業は受講生全体をほぼ同じ人数となるように各クラス 110 名～140 名程度の３クラスに分け，技術用語，考え方及び主な手法等について同じ内容を学ぶ。これによって最低限の知識を共有した上で後半の演習に臨む。 後半の演習は全学生をランダムに１クラス 40 名程度の９クラスに分けた後，それぞれ専攻やコースが異なる５～６人程度のグループに分けて演習形式で行う。この演習ではデータ探索の重要性，可視化の効果，分析ツールの選択と利用方法について説明した上で，グループごとに現実のデータ分析に取り組み，ディスカッションを通じてデータから新たな知見を導出するプロセスを体験する。	半（６回）では，文系・理系の学生が混在したグループ学習の形で，データ分析のプロセスを演習形式で学ばせる。

（改善事項）　創成科学研究科　地域創成専攻（M）

１１．＜履修モデルの説明が不十分＞ 履修モデル及びその補足説明がなされているが，教育クラスター科目を取ることで具体的にどういった研究内容を行うのかについて，受験を検討している者や入学した学生がイメージを持ちにくいため，例えば，徳島県の現状を踏まえてどういった研究内容になるのか等を補足説明に追加するなどして，分かりやすくすること。

（対応）

各履修モデルにおける教育クラスターの履修を踏まえた研究内容が，受験を検討している者や入学した学生にとって具体的にわかりやすくなるように，「地域資料 12　履修モデル補足説明」の各履修モデル説明の末尾に，教育クラスターの履修を踏まえた研究内容（修士論文の研究テーマ）の例を，徳島県の事例も踏まえ複数示した。さらに，「地域資料 12　履修モデル」の各履修モデルの図の中に「修士論文の研究テーマ例」を書き入れた。

（新旧対照表）地域創成資料 12　履修モデル補足説明

新	旧
《履修モデル①》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「防災・危機管理クラスター」関係科目で修得した防災や地域計画に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，防災・減災とまちづくりの課題をリンクさせ，地域社会における防災・減災対策や政策立案に関する課題等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，近い将来発生が想定される南海トラフ巨大地震に備えた防災・減災まちづくりの推進がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例）	《履修モデル①》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，地域社会における防災・減災に関する課題（災害発生後の復興課題も含む）等をテーマとした修士論文を作成する。

・南海トラフ地震に備えた防災・減災まちづくりの取組と実践－徳島県南海岸地域の事例から－ ・高齢者の災害時避難をめぐる課題と対策－A町の事例から－ ・空間デザイン論の観点から見た有効な避難路設計－県南漁村・C町の場合－ ・地域における外国人防災を推進するための行政の役割－リスクコミュニケーションの視点を踏まえて－ 《履修モデル②》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「防災・危機管理クラスター」関係科目で修得した防災・減災や地域福祉等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば健康・福祉系，社会・政策系の学問）を基盤としつつ，防災・減災と地域健康課題をリンクさせ，巨大地震をはじめとする大規模災害時における地域住民の健康・福祉支援等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，近い将来発生が想定される南海トラフ巨大地震発生後の，地域住民の健康・福祉支援をいかに有効に行うかがテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・自然災害時における要配慮者の健康支援のあり方－南海トラフ巨大地震発生に備えて－ ・仮設住宅居住高齢者の身体運動機能およびQOLに関する研究	《履修モデル②》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，巨大地震をはじめとする災害時における地域住民の健康・福祉支援等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。

・高齢者福祉施設における災害への準備と被災後の対応 ・「危機管理」の観点から見た災害時医療と地域連携について 《履修モデル③》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，まちづくりにかかる多面的な知識・技能をリンクさせ，地域の経済・産業振興，観光開発，コミュニティ再生等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，とくに地域における経済・産業の活性化，地域の特性を生かした観光開発，定住化を含む過疎・高齢化対策とコミュニティの再生・再編等がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・徳島市における経済変化と開発計画－コンパクトシティ促進政策をめぐって－ ・地域イベントとまちづくり－徳島市の「マチ☆アソビ」をめぐって ・「サーフィンツーリズム」による地域活性化－徳島県南部地域の事例から－ ・空き家利用による企業誘致と定住促進の試み－徳島県におけるサテライトオフィスの事例から－	《履修モデル③》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，地域の経済・産業振興，コミュニティ再生等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。

《履修モデル④》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，地域史・地域文化研究の知見とまちづくりをリンクさせ，地域の歴史・文化資源の特質，地域歴史・文化資源の保全や観光資源としての活用等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，四国遍路と札所寺院，阿波踊り，阿波人形浄瑠璃，藍の文化，うだつの町並み，山間部の傾斜地農法（世界農業遺産），地域文学等，地域固有の歴史・文化資源の特質と価値に関する深い理解，その保存の方策および観光資源としての効果的な活用方法の検討，政策立案等がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・「阿波農村舞台」を活用した地域活性化－徳島県那賀町の事例から－ ・世界農業遺産を活用した地域創成－にし阿波の傾斜地農耕システムを事例として－ ・阿波人形浄瑠璃の伝承の「戦術」－徳島県内の人形座の調査から－ ・徳島県における「地域文学資源」の活用－モラエスの文学作品をめぐって－	《履修モデル④》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，地域の歴史・文化の構造とその変容，地域文化資源の保全や観光資源としての活用等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。
《履修モデル⑤》	《履修モデル⑤》

（中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，グローバル化する社会・文化や異文化／自文化理解に関する知識とまちづくりをリンクさせ，国際交流・協力，多文化共生のまちづくり等，地域のグローバル課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，近隣のアジア諸地域や提携都市（ドイツ，アメリカ等）との文化交流，JICA 四国とも連携した第三世界の国々（ケニア，ネパール等）への国際支援，異文化／自文化理解も踏まえ，地域における外国人との共生を推進する取組や政策の検討がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・国際交流をめぐる官民連携の取組－徳島県とドイツとの文化交流の事例から－ ・地方自治体による外国人住民への生活支援－A町の事例から－ ・多言語・多文化共生社会における日本語教育－徳島市内の小学校の事例から－ ・地域と世界をつなぐ国際支援の手法－JICA 四国の取組を参考に－ 《履修モデル⑥》 （中略）	（中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，歴史・文化・言語等の普遍性／地域性の理解，国際交流・協力，多文化共生のまちづくり等，地域のグローバル課題をテーマとした修士論文を作成する。 《履修モデル⑥》 （中略）

専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，まちづくりと情報加工・発信の技術をリンクさせ，多様な地域情報の収集・加工・発信に関する技法，地域情報のグローバルな発信に基づく地域創成等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，県内の多様な地域資源の特質の理解を踏まえた，Web や SNS 等を通じたグローバルな情報発信と地域活性化がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・GIS を活用した地域情報のデジタル・アーカイブ化と観光情報発信の試みー徳島県を事例としてー ・VR 技術を活用した「阿波踊り」プロモーション映像の製作 ・SNS を活用した地域観光情報の効果的発信についてー三好市の「そらの里」の事例からー	専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多様な地域情報の収集・加工・発信に関する技法，地域情報のグローバルな発信に基づく地域創成等をテーマとした修士論文を作成する。
《履修モデル⑦》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を	《履修モデル⑦》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く

踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば健康・福祉系，社会・政策系の学問）を基盤としつつ，健康・福祉課題とまちづくりをリンクさせ，地域の健康・福祉課題，健康社会の創成等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，高齢化が進む地域住民の健康増進と福祉課題の解決を最重要課題として，児童虐待，外国人福祉等，増加する地域福祉課題の解決がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・地域在住高齢者の健康づくり支援事業とその効果の検証－A町の取組から－ ・高齢者を介護する家族に対する支援の現状と課題 ・中山間地域における住民参加の福祉活動と「地域共生社会」創成の可能性－B町の事例から－ ・地域における外国人看護・介護人材受け入れに関する課題	発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，地域の健康・福祉課題，健康社会の創成等をテーマとした修士論文を作成する。
《履修モデル⑧》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「メディカルサイエンスクラスター」関係科目で修得した身体構造と機能向上等に関	《履修モデル⑧》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，先端医療機器・技術を活用した健康増進等の課題をテーマとした修士論文を作成する。

する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば健康・福祉系の学問）を基盤としつつ，身体に関する技術的な知識と健康・福祉の現場をリンクさせ，先端医療機器・技術を活用した健康増進等の課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，高齢者に向けた先端的な医療機器・健康器具の開発と，病院や医療・健康増進施設等関連施設への導入促進，及び効果の検証がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・生体機能アシストシステムが身体的・心理的機能に及ぼす影響 ・IT を利用した遠隔健康支援システムの効果 ・医療機器の導入による在宅健康支援の推進 《履修モデル⑨》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「ロボティクス・人間支援クラスター」関係科目で修得したロボットの構造，人間の身体的構造・機能等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば健康・福祉系の学問）を基盤としつつ，ロボットに関する技術的な知識と健康・福祉の現場をリンクさせ，介護・福祉現場におけるロボット技術や介護機器の導入にかかる課題等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，高齢化や介護・福祉従事者の不足を背景として，介護・福祉現場でのロボット導入が喫緊の課題となっており，そ	《履修モデル⑨》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，介護・福祉現場におけるロボット技術や介護機器の導入にかかる課題等をテーマとした修士論文を作成する。

の導入促進，及び効果の検証がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・老人福祉施設における介護ロボット導入効果と今後の課題－A市の事例から－ ・介護ロボットの開発と人材育成－理学療法士・作業療法士・介護福祉士の役割をめぐって－ ・AI を利用した健康支援システムの有効性 《履修モデル⑩》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「データサイエンスクラスター」関係科目で修得したビッグデータ分析，データ処理に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，健康・福祉系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，データサイエンスの知識と自らの専門分野にかかるビッグデータをリンクさせ，ビッグデータを活用した多様な地域課題の解決等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，人口・社会動態（外国人を含む），観光，医療・福祉，地域文化等のビッグデータを活用した，社会・健康・文化等にかかる地域課題の解決策の提言がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・ビッグデータによる人口動態予測を踏まえた地域循環経済の構築－A町を事例として－ ・ビッグデータによる観光客の動態分析－徳島県を事例として－	《履修モデル⑩》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を受講し，ビッグデータを活用した多様な地域課題の解決等をテーマとした修士論文を作成する。

・ヘルスケア・ビッグデータを活用した地域包括ケアシステムの実現 《履修モデル⑪》 （中略） 専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「環境共生クラスター」関係科目で修得した人間と自然の共生，生物多様性・生態系の保全等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，とくに生態系に関わる専門知識と自らの専門分野をリンクさせ，地域の環境保全活動，人間と自然（生態系）の相互関係等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，深刻化する鳥獣害被害への対応，森林や里山等，地域の自然環境の保全と資源管理等がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・野生動物の保護管理システムとしての狩猟－徳島県海陽町の事例から－ ・地域住民による里山環境保全活動の展開－徳島県神山町の事例から－ ・環境倫理の観点から見た生物多様性の保全と自然再生の理念 《履修モデル⑫》 （中略）	《履修モデル⑪》 （中略） 専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を受講し，地域の環境保全活動，人間と自然（生態系）の相互関係等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。 《履修モデル⑫》 （中略）

専攻専門科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「６次産業クラスター」関係科目で修得した農業経済，一次産品の生産・流通等に関する知識を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，とくに一次産品の特性に関わる専門知識と自らの専門分野をリンクさせ，地域の特色ある農林水産資源を生かした地域振興等をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，鳴門金時，スダチ，ワカメ，阿波晩茶等，地域の特産品を生かした地域創成等がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・エディブルフラワー栽培による地域活性化の取組－吉野川市を事例として－ ・「阿波晩茶」の地域資源化と地域づくり－徳島県上勝町の事例から－ ・徳島県におけるワカメ養殖の現状と課題－Ａ漁協の取組より－ 《社会人　履修モデル①》 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策	専攻展開科目では，グローバルな視点を含め，地域課題の本質の理解と解決に必要な専門知識・技能を修得する。 （中略） 学位論文指導科目では，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につけさせる。「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，地域の特色ある農林水産資源を生かした地域振興等をテーマとした修士論文を作成する。

系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，まちづくりにかかる多面的な知識・技能をリンクさせ，地域資源の活用と地域創成に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，とくに地域固有の歴史・文化・自然資源（四国遍路と札所寺院，阿波踊り，阿波人形浄瑠璃，鳴門の渦潮等）を活用した地域活性化や観光開発等がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・日本遺産「阿波藍」による地域活性化 ・地域におけるボランティアガイド育成と観光開発－美馬市脇町の「うだつの町並み」を事例として－ ・「木頭ゆず」のブランド化と地域活性化－那賀町の事例から－ 《社会人　履修モデル②》 （中略） 学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，グローバル化する社会・文化や異文化／自文化に関する知識とまちづくりをリンクさせ，国際交流・協力，多文化共生のまちづくり等，地域のグローバル課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，近隣のアジア諸地域や提携都市（ドイツ，アメリカ等）との文化交流，JICA 四国とも連携した第三世界の国々（ケニア，ネパール等）への国際支援，異文化／自文化理解も踏まえ，地域における外	

国人との共生を推進する取組や政策の検討がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・官民連携型の国際交流プログラムの開発 ・外国人が参画するコミュニティづくりーA町の事例からー ・異文化／自文化理解と国際交流ー徳島県鳴門市の事例からー ・NPO・NGOによる国際支援と内発的発展 《外国人留学生　履修モデル①》 （中略） 　学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 　以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，まちづくりにかかる多面的な知識・技能をリンクさせ，地域の経済・産業振興，観光開発等に関する課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，とくに地域における経済・産業の活性化がテーマ例として考えられるが，これは外国人留学生が帰国して出身地の地域創成に貢献する場合も有効な研究テーマである。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・文化遺産観光の展開ー日本と中国の事例を比較してー ・中国の経済開発における経済特区の意義 ・観光開発におけるアクターの交渉と調整過程 《外国人留学生　履修モデル②》 （中略）	

学位論文指導科目では，「地域創成特別演習」「領域横断セミナー」を履修し，多面的な視点を踏まえ研究成果を修士論文としてまとめあげ，広く発信する能力を身につける。 以上のような本専攻における教育課程を踏まえ，とくに「地域開発クラスター」関係科目で修得した地域計画・地域政策等に関する知識・技能を生かし，自らの専門分野（たとえば社会・政策系，グローバルを含む文化・情報系の学問）を基盤としつつ，グローバル化する社会・文化や異文化／自文化に関する知識とまちづくりをリンクさせ，国際交流・協力，多文化共生のまちづくり等，地域のグローバル課題をテーマとした修士論文を作成する。徳島県を事例とした場合，近隣のアジア諸地域や提携都市（ドイツ，アメリカ等）との文化交流，JICA 四国とも連携した第三世界の国々（ケニア，ネパール等）への国際支援，異文化／自文化理解も踏まえ，地域における外国人との共生を推進する取組や政策の検討がテーマ例として考えられる。 （具体的な修士論文の研究テーマ例） ・国際交流事業における異文化理解の重要性－日中友好協会の事例から－ ・地域のグローバル化と多言語・多文化サービスの推進 ・在日留学生の異文化適応と日本観	